

# Y高文芸部物語

——遠野喬志誕生秘話

元顧問 御影祐 1名 と 文芸部員 10名



# Y高文芸部物語——遠野喬志誕生秘話

元顧問 御影祐 1名 と 文芸部員 10名

本書は「Y高文芸部物語——遠野喬志誕生秘話」と題して「もじのイチ」主催遠野喬志君の若き頃を探求する小品である。

後に活躍する彼がいかにして誕生したか。Y高文芸部時代を中心に、その秘話を語りたいと思う。

同時に創作を志す諸兄のために、永遠の少年御影祐が表現力を磨くヒントをいたるところにちりばめたので、ぜひ参考にしていただきたい。

では、遠野喬志誕生物語の始まり始まりイ……(^\_^)。

## ===== 目 次 =====

[1] Y高文芸部活動方針	2
[2] 部活1年目	7
[3] 小説の三要素	17
[4] 文芸部2年目の活動	26
[5] 地味イな青春論	33
[6] ブンゲーブの青春	38
[7] 北海道、三度の偶然	44

## 後 記

### クイズ

- (ア) 白鶴リカの課題「食べる」に描かれた食べ物は? 13頁参照
- (イ) アナグラム「いかやたつまき」の本名は? 19頁参照
- (ウ) 遠野喬志君の文芸部でのペンネームは?
- (エ) 元顧問御影祐が託した架空部員のペンネームは?
- (オ) 当時顧問は部員が「同時進行の青春小説を書く」ための舞台を用意した。  
ただ、部員にその思いを伝えなかった。なぜか。  
理由は「彼らが○○○○だから」。○内の言葉は? 36頁参照

### 御影祐より

本稿は伏線を明示したり読者への罠を仕掛けており、推理小説に似た作品となっています。先に結末を見ると面白みが半減するので冒頭からじっくりお読みください。

## [ 1 ] Y高文芸部活動方針

もはや「昔々あるところに 1 人の顧問と 10 人の文芸部員がいた～」と言うべきか。今をさかのぼること  $3 \times 10$  年近く前。

あと 2 年で地球が滅亡すると予言され(て外れ)た……1997 年 4 月初旬。

関東某県 S 市において Y 東西高校の入学式が行われた。

翌日新入生オリエンテーション。午後は部活動の勧誘、見学の時間にあてられた。

文芸部は中央棟 3 階ワープロ室を活動場所としていた。ワープロとあるとおり、機器は昔懐かし「文豪」であったが、前年更新され DOS-V パソコンに変わっていた。

ワープロソフトはあのころ一世を風靡した「一太郎」。この太郎が「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり……」の栄枯盛衰をたどると一体誰が予想しただろう。

ちなみに「DOS-V」を「ドス・ブイ」と読めた人はお年が知れる。

それはともかく、真新しい 50 台のパソコンとプリンターが置かれた教室に、新入生 7 名が集まった。もちろん初々しき美少年(^.^)遠野喬志君もその中にいた。

ここで「あれっ 7 名じゃなく 10 名でしょ」とつぶやいた方は冒頭(表題、著者名)からしっかり読んでいる感心な読者として称賛したい。

このときは 7 名。文化祭の後 1 名退部して 4 名が新規入部。結果 10 名となり、以後 10 名は 3 年(1 学期)まで活動した。

【かりそめにも小説・脚本、漫画・アニメなど創作を志す人が他人の作品を読むとき、飛ばし読みするようでは創作家を名乗る資格はないと思う。】

緻密に読んで「おやあ」とつぶやいたり、「これは伏線かあ」と疑問を抱きつつ読むべきだ。映像作品を見るときも同じ。この習慣がないと伏線の回収に気付かず、自作に伏線を入れることもできない。

最近映像作品のビデオを倍速で見る人が増えているという。自分が製作者としたら嬉しいことだろうか。】

ちなみに 10 をひっくり返せば 01。すなわち 101 匹わんちゃんならぬ 11 人の文芸愛好家がこの年あの場所に集まることになる。

当時の顧問にとって彼らと過ごした 3 年間は宇宙空間に浮かぶ孤独な惑星がテンペル・タットル彗星と出会ったときのような、稀有にして素晴らしい偶然だったと感じている(以下「私」)。

余談ながら 4 年後の 3 月、私は早期退職して執筆活動に乗り出す。彼らとの邂逅と 3 年間がなければ、私は教員をやめることなく、創作の道を進むこともなかつただろう。

【ここは新たな伏線(^.^)。「テンペル…彗星？ 何それ」とつぶやけば、伏線だと気づく。どこで回収されるか？】

それはさておき、文芸部説明会にやって来た新入生を迎えたのは顧問Sこと後の御影祐。このような場合、普通上級生部員が活動内容を説明する。

ところが、過去2年部員は不在。顧問がやらざるをえなかつた。

私はY高に赴任して5年目。それまでも文芸部顧問だったが、活動は生徒に任せてもつまり自由放任だった。しかし、この年だけはひそかな思いを抱え、積極的に関わろうと考えていた。

簡単に言えば、自由をやめて鉄鎖と桎梏を。勝手気ままではなく顧問が課題を与え、部員はそれを作品化する。そして、プリントアウトしてみなで合評する。

私は集まった新入生に活動方針を説明した……。

【ここで「難しい漢字が多いなあ」とつぶやかれたかも。

難読漢字(一世を風靡・緻密・稀有・邂逅・鉄鎖・桎梏)は読めたか、意味を言えるか?

また「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり……」のところで『平家物語』の冒頭か」とつぶやけないようではこれもちと……。基礎的素養として学んでおきたいことがらだ(と思う)。】

後にある部員が書いた作品(7月執筆)の中に当時の様子が詳しく書かれている。

Y東西高校や文芸部の活動実態にも触れているので、それを引用したい。

---

Y東西高校の文芸部は今1年生7人しかいない。東が4人で西が3人。

S市にあるうちの高校は全国でも珍しい双子高校で、同じ敷地内に東と西、二つの高校がある。

1学年7クラスだから東西全部で42学級。だから、施設やグランドなどかなりでかい。

基本の授業は別々なんだけど、選択授業、それに運動会や文化祭の行事なんかは東西合同でやる。

東には音楽コースと美術コース、西には体育コースと外国語コースの専門コースもある。ぼくは東の一般コース。つまり普通科みたいなもんだ。

部活動は基本的に東西別々だけれど、いくつかのクラブは合同で活動している。

文芸部も東西合同の部活だ。顧問のS先生によると過去2年間休部状態で、そろそろ廃部にするつもりだったらしい。

4月初め、S先生は新入生向けのクラブ説明会でこんな提案をしてきた。  
「文芸部というのはどこの学校でも部員各自が詩や小説を自由に書き、冊子を作って発表というパターンが多い。この文芸部もそうだった。

しかし、クラブ全体の日常活動として考えると、それではクラブとして寄り集まる意味がない。それに自分で書いているだけで批判されることがないと、文章表現の練習にならない。

そこで今年から部員が自分勝手に創作するんじゃなく、先生が出す課題に沿って全

員同じものを書く。そして、みんなでその合評を行う……」

先生はそのような文芸部にしたいと言つてきた(つまり「切磋琢磨」ってやつだ)。

もちろん各自好きな詩や小説を自由に書いて構わない。ただクラブ全体としては[課題→書く→合評]の三段階でやる。「一年生がその条件に従ってくれるなら本腰入れてやりたい」と締めくくった。

入部希望者7人は全員先生の提案に同意した。

もっとも、新入生が入学早々先生に逆らうわけなかつたけどね……。

そんなわけで文芸部は1年生だけで再スタートってことになった(ぼくらはみな新だけど)。

これまで春の遠足や芸術鑑賞当日の体験を八百字程度で書いたり、筒井康隆の『バブリング創世記』をまねて「自分創世記」を作つたりした。

それぞれ「遠足当日の自然描写を入れよ」とか、芸術鑑賞では「会場となった建物を書け」などいろいろ条件がある。

今度の課題なんか「顔を描く——その際直喻を必ず入れる」だった。いわゆる「～のように」ってやつだ。絵じやないんだから、文字で人の「顔」を書くのはかなりしんどかった。

合評の方は作品を順に読んで行って良い点悪い点を批評し合う。

みんながどう課題に取り組んだかすぐわかるし、部員それぞれの個性的な文章が読めるので結構楽しい。

きっちり課題をこなした作品に感心する一方、何だかよくわからない難解な作品があつたりする。西校のAなんか課題にちっとも答えない、はちゃめちゃな文章を書く。

先生はうんざりしているけど、ぼくはそれもそれでいいかなと思う。

合評の作品には作者名をつけていない。それでもだいたい誰が書いたか見当はつく。

だから、批評も書いた人を傷つけないような言葉が多い。それでもときにぐさっと刺さる批評が出る。先生を含めて全員が批評するので、自分の番になると内心どきどきする。

部員の作品を読んで「うまいなあ」と思つたり、自作を振り返って自己嫌悪に陥ることもたびたびだった。(「透明な叫び」より)

～以下略～

---

部活説明会に現れた遠野喬志君について、「新入生7名の中でちょっと異彩を放っていた」と書きたいところだが、私にそこまでの眼力はなく、彼はフツーの生徒にしか見えなかつた。今となってはむしろ忘却の彼方に消えた…土偶のようと言うべきか。

ただ、三白眼でこちらを見るようなところと、創作に関して「自分は自信があるぞ」みたいな気配は感じ取れた。実際(後に知ることとなるが)彼は中学校時代すでに小説を書いていたし、キーボード入力は上級者レベルだった。

それは他部員も感じとつていたのだろう、4月末彼は部長に選ばれた。ちなみに、

副部長は女子でこちらも創作経験済みの「規元和己」(ペンネーム)になった。

ここで新入生部員が想像すらしなかったんだろう秘話(その1)を語っておこう。

私は自由放任だった文芸部に積極的に介入しようと思った。それはなぜか。「課題→実作→合評」の形を取ったわけは。

表面的な理由は上記に書かれたとおりながら、私にはもっと深い、隠された意図があった。もちろん部員には(卒業後も)一切明かしていない、文字通りの秘話である。

私的なことながら、その年1月私の母が九州の田舎で亡くなった。2年前大腸癌が発覚し、手術と入退院を繰り返した末の逝去だった。実家には父一人が残された。

私には兄が一人いて実家から車で1時間ほどのところに住んでいた。私は独身だったが、兄は妻子4人の家族持ち。父に何かあれば駆けつけることができる。

その点不安はなかったけれど、父は長年連れ添った伴侶の死に、かなりショックを受けていた。

後に「毎日仏壇に参りながら早く迎えに来てくれとつぶやいていた」と語ったし、立ち直った後は冗談めかして「あのころは首をくくろうかと思うちょっと」と言ったほどだ。

私は遠く離れたところで働いていたので、どうしようもなかった。と言うより父がそこまで思い詰めていたとは思いもしなかった。

ただ、いつか訪れるであろう父の最期は自分が看取りたいと思った。そのためには教員をやめて帰郷しなければならない。正直教職以外の仕事でやっていける自信はなかった。

余談ながら、教師業はかつて軽蔑的に「でもしか先生」と呼ばれたことがある。「先生にでもなるか・先生しかなれない」の略(あくまで昔の話)。

そこに追加すると高校の先生には「なんとか崩れ」が多いかもしれない。たとえば、国語なら大学国文科を卒業して高校の先生になった。だが、ほんとは作家になりたかった、大学院まで行って研究者になりたかった……ってやつだ。

生徒や保護者には失礼な話ながら、私はその両方に挫折して高校教師になった一人である(^\_^;)。

大学時代教員免許は取っていたものの、教師になる気持ちはなかった。しかし、大学4年の教育実習を体験して「学校の先生も結構面白い」とわかり教員になろうと思った。

そして、関東某県の採用試験に合格して高校教員となった。それから早期退職するまで二十数年、私がどのような先生だったか——は本稿の趣意ではないので割愛したい。

ただ2点書き留めておきたいことがある。

私は大学の卒論で志賀直哉を研究して『暗夜行路』成立過程論を書いた。それは先生方に好評で、主任教授から「うまくまとめれば大学の紀要に出せますよ」と言わ

れた。

学生にとって最高の誉め言葉だった。私はいつかまた研究して論文にまとめたいと思った。

だが、日々の生活に追われ、卒論は顧みられることなく十数年が過ぎた。前任校の末期「紀要に出せる」と言ってくれた教授が定年を迎えると聞いて研究を再開した。

そしてY高赴任前、原稿用紙数百枚の研究論文に仕上げた。長編『暗夜行路』の解釈と成立過程を論じたら、どうしても短くまとめることができず、論文は大学紀要に載せられる分量をはるかに超えていた。

どうしようかと迷ったけれど、これも記念だと思い、『我が青春の「暗夜行路」』と題して冊子にした。ワープロ「書院」で活字化して製本のみ業者に頼んだ。そして、定年退官の日にそれを大学まで持っていき、先生方と参加した人たちに渡した。

新旧の友人たちは冊子をぱらぱらとめくって「よく作ったなあ」と感心したような、呆れたような声をもらした。大学の卒論をまとめて本にするなんて「物好きな」といったまなざしだった。

【冒頭部「永遠の少年御影祐」のところで「おやあ変わった表現だ。前後に説明がないから伏線かも」とつぶいた人はここに来て「回収された」と気づく……(かどうか?)。】

少年＝青春ととらえてもらえばわかつてもらえるかもしれない。さらに、これも伏線として後に再度取り上げる。】

もう一つ。当時の高校現場は牧歌的というか、春・夏・冬の長期休暇は部活動や大学受験用の講習以外、日々の仕事は少なく時間に余裕があった。私はそれを利用していくつか小説を書いた。短編・中編を中心として2年に一作くらいだろうか。

作家になりたいとの気持ちは中学のころから抱いていた。普通なら書き上げた作品を文芸誌の新人賞に投稿するだろう。

だが、多くは未完に終わり、完成作も到底本選に進む出来には——それだけは(情けない話ながら)自信があった(^\_^;)。

人々群れるのが嫌いだったこと也有って同人誌に参加することもなく、習作のつもりでなんとなく書いているだけだった。

【ここまでを読んで、私が97年の文芸部新入生に対して[課題→実作→合評]の活動を提起した(深い)理由を推理できる方は探偵小説が書けるのでは、と思う(^\_^)。】

## [ 2 ] 部活 1 年目

さて、1年時の課題は以下の通り(末尾は実施月)。

### [ 1 年時 (97 年度) 課題 ]

- 1 「遠足の日」を書く 5月
- 2 筒井康隆『バブリング創世記』をまねて『自分創成期』をつくる 5月
- 3 「芸術鑑賞の日」を書く 6月
- 4 「顔」を描く 7月
- 5 「叫び」をテーマにショートショートを作る(文化祭文芸誌統一テーマ) 8月
- 6 「文化祭準備期間」を描く (文化祭冊子『百八煩惱』製作) 9月
- 7 「ある～時、ある～所に、おじいさんとおばあさんがいました」を冒頭に  
「物語」をつくる 10月
- 8 「食べる」を描く 11月
- 9 「博物館」を描く(S市立博物館訪問) 12月
- 10 現代都市をテーマに「絵本」をつくる 98年1月
- 11 源信作『往生要集』を参考に現代版「地獄物語」をつくる 3月

1年目最大の目的はとにかく表現力を身につけること。私はそれを「文字デッサン」と呼んだ。

絵画などは必ずデッサンから始まる。奇想天外な「泣く女」を描いたピカソも、燃えるひまわりのゴッホも、最初は静物、人物、風景をリアルに描く訓練を積んでいる。

ならば、文章だってまずはデッサン力。しかも、芸術的独創的な文体は必要ない——と言うより天才でもない限り、初めから素晴らしい文体が生み出せるはずもない。

まずは普通の文章がフツーに書けること。主述の対応、漢字、助詞テニヲハの使用。推敲して誤字脱字を訂正するなど、今現在の能力を駆使して原稿用紙1、2枚の文章をつくる。特に推敲は「避板法(同じ言葉が繰り返されることを避ける)」ために必須の作業。「知らない人の作品を粗探しするつもりで読みなさい」と言ったものだ。

そこで1学期の行事だった遠足や芸術鑑賞の日を書く課題を設けた。前者は「その日の天気を書き込む」、後者は「会場の建物を必ず入れる」など条件をつけた。

部員は「こんな課題ブンゲーブラしくない」と思ったかもしれない。

2回目の課題は知る人ぞ知る筒井康隆の掌編をまねる課題。

単なる作文ばかりでは面白くないので取り入れた。

『バブリング創世記』とはジャズの擬音を巧みに使った家系図のような小品。

冒頭は以下。

「ドンドンはドンドコの父なり。ドンドンの子ドンドコ、ドンドコドンを生み、ドンドコドン、ドコドンドンとドンタカタを生む。ドンタカタ、ドカタンタンを生めり…」と奇妙奇天烈な表現が続く名(迷?)作だ。それをまねて自分用の「創世記」を作

ることにした。

4回目の課題「『顔』を描く」には以下のような条件をつけた。

---

課題「ある人物の『顔』を描く」

条件

- ・身近な家族・友人、有名人などから1人選んで、その顔(体全体でも可)を表現する。
  - ・(1)好意に満ち満ちた表現 (2)悪意に満ち満ちた表現——両方またはいずれか。
  - ・直喻(～のような)を一つ入れる。・題名を必ずつける。
- 

7人の作品は以下のとおり。

- A 「身投げ」 B 「GOING MY WAY な奴」  
 C 「河村隆一について」 D 「その男」  
 E 「教訓」 F 「姉ちゃんの顔と性格」  
 G 「誰かの、世界(かお)」

題名が個性的というか、工夫が見られることがおわかりだろうか。つけがちな題「顔について」は一つもない。

別に「小説にしなさい」と指示したわけではない。エッセーと考えれば、題を「顔について」としそうだが一つもない。

私は国語(現代文)の授業でよく百字感想文を書かせた。

たとえば、芥川龍之介の『羅生門』や『鼻』を授業でやる際、読了後すぐに100字前後の感想を書く。そのうち半分ほどをコピー、印刷して次の授業で生徒に紹介した。作成するこちらは大変だが、生徒には好評だった。

このとき感想文の題名を「『鼻』を読んで」とか「『羅生門』を読んで」としてはいけない。「やったら減点するからな」と脅したものだ(^.^)。「それはあなたの題名じゃないんだ」と言って。

だから、文芸部でも「題名に凝れ。安易な題をつけるな。作品を身体とするなら、題名は〈顔〉なんだ」と強調した。

二人だけ冒頭を紹介しよう。

---

A 「身投げ」

私は初めてその人を見たとき直感した。

「この人は私に似ている」

容姿や、表面的にどうとか、そうではなく、ただ、それは直感だった。

北の国ならではの、冷たい雪原を思わせる白い肌、その上に纖細に彫り込まれた、常に微笑を浮かべたような唇と、ヨーロッパ系の特徴的な鷺鼻。世のすべてを高みか

ら見下ろすような瞳と、賢者の威厳を惜しげもなく醸し出す表情。何処も似てなどない。

～以下略～

---



---

## G 「誰かの、世界」

肥沃とはとてもいえない黄色の大地に、神は世界をつくられた。

大気の循環を繰り返すことを運命づけられた山、「はな」。

空間に、意識の波動を送り続ける洞窟、「くち」。

別の世界から送られるその波動を、新たな意識として取り込む港、「ひとみ」。

それぞれを適当な位置に置き、精神を吹き込む。それを一人の神が務めるはずだった。

しかし、その世界において、両の「ひとみ」だけはまるで別々の神から賜ったように、在った。

右の瞳は、汚れなき陽光を封じた、木の実を象っていた。

～以下略～

---

部員にはもう一つ、「中断、未完は許さない。必ずエンドマークを打て」とくどく注意した。これは部員にとって結構きつかったようだ。

課題には当然締め切りがあった。それに部員はパソコンに習熟した者、初心者とばらばら。初心者はキーボードに慣れていないので時間がかかった。

特に後半の「物語」など起承転結に注意するようになってからはうまくまとめられない作品が相次いだ。

よく言ったのは「確かに〈結〉がないと、中途半端だとわかるし、物足りない気持ちになる。だが、短編小説は必ずしも起承転結が整っていなくていい。ぶつ切りみたいに見える作品がかえって深く考えさせ、余韻をもたらすことがある。だから、終わりに見えなくて構わない。とにかく『自分はこれで終わり』という書き方をしなさい」と。

ここで賢明なる読者は以下のような感想をつぶやかれたかもしれない。

先ほど「私の習作は未完が多かった」と書いた。なのに部員には「未完にするな。必ずエンドマークをつけろ」と指導した。

「あんたは自分ができないことを生徒に要求したのかい」と思われて当然である。だが、これにも深い理由があった（後述）。

それはさておき、夏休みに突入すると、文化祭の統一テーマを「叫び」とすること

に決めた。そして、夏休み中に文化祭冊子の原稿となる作品を制作することになった。

同時に 97 年文化祭冊子の表題を部員で話し合って『百八煩惱』とした。

以下は冊子の内容。もちろん遠野喬志君の作品もこの中にある ([ ] 内はペンネーム)。

### 『百八煩惱』目次

---

『百八煩惱』——統一テーマ「叫び」

※詩三篇 「THE DEATH」・「ENDLESS WAR」・

「The Lonely Knight」	[海 堂 聖]
---------------------	---------

※ショートショート

「日常風景」	[規元和己]
「……の叫び」	[大根鉄髭]
「形勢逆転娘物語(シンデレラストーリー)」	[神 楽 姫]
「ご注文の品できあがりました」	[悠原将姫]
「カルマ・海」	[黒鴉ロカ]
「偽りの雄叫び(ウォークライ)」	[虚 空 子]

※小品集

「姉ちゃんの顔と性格」	[神 楽 姫]
「日常茶飯事」	[神 楽 姫]
「叫び」	[悠原将姫]
「HYPOCRITE——偽善者」	[海 堂 聖]
「ヤな奴」	[規元和己]

※中編

「文芸部作品第八——透明な『叫び』」	[久保はてな]
--------------------	---------

---

文化祭冊子のテーマを「叫び」としたのは 97 年当時の社会情勢と関係している。

あのころ十代以降の人は今でも記憶に留めているのではないだろうか。

同年 2 月から 5 月にかけて発生した少年「A」による児童連続殺傷事件—所謂「酒鬼薔薇聖斗」事件は社会を震撼させた。切断された児童の首が中学校の正門に置かれ、マスコミに犯行声明が送付されるなど特異な事件だった。犯人が逮捕されると「普通」の中学生 3 年生であり、連続殺傷事件だったとわかつてさらに衝撃を与えた。

もう一つは「あの頃日本の少年少女を熱狂させたアニメは?」とクイズにすれば、多くの人が答えられるだろう。「新世紀エヴァンゲリオン」である。

1995 年にテレビ放映が始まり、1 年後不可解な形で終わる(中断?)。翌 97 年 7 月の映画版にて一応の結末を迎えるものの、その後も映画版は継続され、最終的に完結したのは 2021 年であった。

巨大な汎用人型兵器「エヴァンゲリオン」のパイロットとなって謎の敵「使徒」と戦うのは 14 歳の「普通」の少年少女たち。普通だが、生い立ちや心に様々な問題を抱え、どうして戦わねばならないのか悩みを抱えていた。

私は当時の十代がムンクの絵『叫び』に似て、何かを叫んではいるけれど、何を叫んでいるかはわからない——そのように受けとって文化祭冊子のテーマとした。97年入学の文芸部員は正にこの世代ど真ん中だったから。

だが、残念ながら提出された作品は多くが小説としてもエッセーとしても冊子に掲載できるレベルではなかった。唯2編は採用できると思った。

その一つが虚空子作「偽りの雄叫び」。テーマと無縁に見えたけれど、心理描写が巧みだし、アニメ原作的戦闘小説として完成していたので採用した。

以下虚空子「偽りの雄叫び」の冒頭。

なお、これから紹介する部員の作品は(本文同様)数行単位で1行空けている。  
ネットコラムの書式だが、元部員は事後承諾でお願いしたい。

---

偽りの雄叫び

虚空子

「レグルスよ」

帰陣の途上、父が前触れもなく口を開いた。

一瞬振り向くことを戸惑った。僕はまだ、この名前で呼ばれることに慣れていない。

「獅子の眷属の長となる者に代々伝えられる秘儀、雄叫び、どうだ、そろそろ極意が少しでもつかめたか」

笑顔を一片すら見せずに、言った。

「いえ、一向に・・・」

父と目を合わせずに答える。この問い合わせにはいつだって憂いが含まれているからだ。

答えそのものも、ともすれば他人事のように聞こえたであろう。僕はこのことに、あまり熱心に取り組んではいない。

「そうか・・・まだ今は、ノイルと呼ばねばならんようだな」

できれば僕は、ずっとその名前でいたかった。「レグルス」の名が本当に捧げられるべき人物を、僕は知っている。

～以下略～

---

戦闘能力を極限まで高める秘儀としての「雄叫び」という構想が面白く、戦闘の様子など迫真的な描写で惹きつける。「ノイル」には兄がいて秘儀の極意をつかんで「レグルス」となったが、その日に戦で死んでしまった。ノイルの悩みもよく書いている。

虚空子君聞いたわけではないが、中学校時代の旧作を「叫び」が重なるので「そのまま提出したかな」と思ったものだ(^.^)。

もう一つは久保はてな作「透明な叫び」。

冒頭は以下。

---

## 透明な叫び 久保はてな

「ただいま……」

「おかえりなさい。どうだった、学校は？」

台所からママが聞く。毎日、はんて押したような言葉だ。それは夏休みに入っても変わらない。

「別に、特に何もなかったよ」

ぼくもはんて押したような答えを返す。それから、ぼくはバッグをめんどくさそうに肩にかつぎ直して、そのまま二階にあがろうとする。でも、ママは許さない。親子の会話ってやつをしたがるんだ。

ママはエプロンで手を拭きながら、ぼくの前に現れた。

「今日学校にはクラブで行ったんでしょ。どうだったのよ」

「どうって？」

「あなたの、さ・く・ひ・ん。今日は合評会じゃなかったの。先生や皆さんの評判、どうだった？」

ママはぼくの作品を読んでいたから、文芸部の合評があった日には、ぼくの作品がどう評価されたか、必ず知りたがる。さらに、クラブの仲間の作品にもああだこうだと寸評を加える。どうやらママも、昔はいくつか詩や小説などを書くブンガク少女だったらしい。

～以下略～

---

こちらは正に文芸部新入生の「ぼく」を主人公とした日常が描かれる。彼はさまざまなことを体験して、ムンクの「叫び」は何を叫んでいるのか考えるというストーリー。テーマに正面から向かっている点は評価できる。

掲載するつもりはなかったけれど、入れないと冊子(A5 タテ)が 100 頁に到達しないので、不本意ながら採用した。【この意味は後にわかります。】

文化祭を経て部員にはまだまだ小説執筆の心構え、構想の立て方、地の文を書く力が弱いと考え、文化祭冊子の合評では詩を除いてかなり痛烈に各作品を批判した。

部員は少なからずショックを受けたようだ。

文化祭後(先ほど書いたとおり)部員は 10 人になった。

そして、「文字スケッチ」をワンランクアップさせるべく、「8 食べる」を描く、「9 博物館」を描く(S 市立博物館訪問)を設定した。

文字スケッチだけでなく、物語・小説的要素をこめて描こうと激励した。

【物語・小説が何であるか、解説しないまま「それを意識して課題を書け」とは「何と強引な」と思われるかもしれない。これに対しては以下の弁明がある。

たとえば、まだ泳げない児童に「水中の浮かび方と泳ぎ方」を教室で 10 時間講義

する先生はいない。いくら説明しても泳げるようにはならないだろう。まずプールに入って浅いところで水遊びをする。すべからく技能・技術は実体験からスタートするのである。】

閑話休題。

9は学校から歩いて10分ほどのところに市立博物館があったので、それを訪ねて体験を書く課題。入り口までは全員そろって行き、中は一人一人ばらばらで見学した。

私も初めてだったので、1時間ほど歩き回った。これは2年に進級後実践する活動の伏線の意味合いもあった。

学校は授業でも部活でも校外活動にうるさい。外に出るときは必ず管理職の許可を得なければならない。普通「ブンゲーブが校外活動なんて」と思われる。私としては「今年の文芸部はちょっと違いますよ」と管理職に伏線をほのめかしたというところだ。

【ここを読んで「中は一人一人ばらばらで見学」のところは「なくてもいい細部描写」と思われたかもしれない。だが、これは敢えて書いている。つまり、伏線と見抜けるかどうか、読者への挑戦である。「どーしてこんな当然のことを書いたのか」とつぶやき、「もしかしたら伏線かあ」と推理する。後に出てきたとき「やはり『一人一人ばらばらで見学』は伏線だったか」とつぶやける(^.^)。】

課題「食べるを描く」から一つ紹介する。

白鴉リカ「恋人よ」

---

恋人よ

白鴉 リカ

私はグルメである。

その辺の筋では、ちょっと有名なくらいグルメである。

そして妻は、そんな私の好みをよくわかってくれている。

今日彼女は腕によりをかけて、私の大好物を作りにかかっている最中だ。

…それはまるで、永遠の恋人のように、私が追い求めてきたもの。

…それはまるで、蜃気楼か逃げ水のように、私の手を拒み続けたもの。

なめらかな褐色の肌には甘い輝きを放つ珠玉がちりばめられ、そのふくよかな身体を七色に彩る。魅惑的な身体を優しくかじってみると、微かな抵抗を伴い、柔らかな感触が私の歯を翻弄するのだ。

舌の上で愛撫にとろけるように反応し、鼻をくすぐるシナモンの薰りが口の中に広がり、思わず私は目を伏せる。

おお！早く君に触れたい！君を隅から隅まで味わいたいのだ。褐色の肌の恋人よ、早く私をめくるめく官能の世界へ連れていってくれ！君を抱きしめた拍子にこぼれ落ちるであろうダイアモンドの一粒も、逃すものか。…ああ、愛おしい私の…。

～以下略～

---

ラストまで残り3行。ここで切るのは問題ありだが、あえてクイズにしてみたい。さて、「私」が食べようとしているものは何か。

白鴉リカは個性的な表現が多く、ちょっと孤高の雰囲気を漂わせる生徒だった。細部の情景描写が巧みで、私はよく「光る表現だ」と赤丸をつけた。合評でも鋭い指摘があった。

課題「博物館を描く」から2作紹介する。  
まず虚空子「はくぶつかんといふものは」

---

### はくぶつかんといふものは 虚空子

突然だが、私の博物館研究方法。それは「逆回転」である。

今私は、自然・歴史展示室第三コーナー「くらしの姿」に建てられた、わらぶき屋根の下にいる。通路から見れば裏側、だいだい色の照明がげんなりとライトアップする様を、冷ややかに眺めつつ、これを書き上げるのに必要な記憶のダウンロードを行っている。

「サード・エレメント第十六区画ナンバー12。ダウンロード完了しました」

デジタルボイス  
案内嬢の無表情な合成音声が、寂しい。ともすれば見捨てられているかもしれない  
空間に甲高く響いた。

突然、そこにL・K嬢がひょっこりと顔を出した。まずい、聞かれたか…。

ふっと視線がかち合った。彼女の目が「さこそ異様なりけめ」もしくは「げに怪しげなり」と語っている。

私はきよとんとした、ふりをした。彼女はそそくさと逃げていく。

ああどうしましょ、もしこれでS(しゅがあ)氏に、「ヤニ吸ってた」とか密告されたら…！

…まあいい。奴の記憶は後でどうにでも悪戯<sup>いじ</sup>れるのだ。とりあえず先ほどダウンロードした記憶を、ここにあげておこう……。

～以下略～

---

博物館について書いていることは間違いないけれど、途中奇妙な、不可解な表現が出てくる。素直に書かず、自分の世界に引き込もうとするのが虚空子の特徴だった。

次は久保はてな「失恋博物館」

---

## 失恋博物館

久保はてな

市立博物館前で彼女と待ち合わせた時間は午後一時だった。クラスの仲間連中のバカなカード・ゲームに付き合ったおかげで、危うく約束の時間に遅れるところだった。

ぼくは学校から猛スピードで自転車をすっ飛ばした。そしてたった三分で市立博物館に着いた。腕時計を見ると一時ちょっと前、ぎりぎりセーフだ。だが、彼女はまだ来ていない。取りあえず自分だけは約束の一時に間に合ったので、ほっと一息ついた。

博物館は建って一年か二年ということで、とてもきれいな建物だった。右上部に天体観測用の丸ドームが飛び出している。博物館の入り口付近には紅葉した枯れ葉がたくさん落ちていた。もう十二月だし、道すがらの木々がほとんど枯れ木になっているのに、ここのクヌギやナラの木はまだ紅葉した葉っぱをたくさんつけていた。

市立博物館では今『プラネタリウムと全天周映画』というのをやっている。

「今度の試験が終わったら行ってみない？」そう誘ったのは彼女の方だ。

この四月Y高に入ったばかりのぼくは内心どきどきしながら「いいよ」って答えた。さすがコーコー生ってのは積極的だ、って思った。どうもうじうじしがちなぼくと比べると、彼女はとてもあっさりしていた。

二学期の期末試験は昨日終わった。期末試験後学校は午前中授業になる。それで今日の午後一時、博物館の前で待ち合わせよう——ってことになったわけだ。

ところが、何てこった。入り口ドアの張り紙に「プラネタリウムと全天周映画は今週休止です」とある。せっかく彼女と隣同士で椅子に座って夜空の星座を眺める——なんてロマンチックな気分になるはずだったのに……。

空はどんより曇って今にも雨が降り出しそうだ。いくら冬とは言え、せっかくの初デートに水を差す——とはこんな天気を言うのだろう。それにしてもプラネタリウムと全天周映画がやっていないとは……。

ぼくはそれから寒空の下で彼女を待った。十分、二十分、三十分。

ぼくは次第に不安になってきた。彼女の姿はちっとも見えない。彼女は自分の家から来る手はずになっている。何か事故でもあったのか。あるいはぼくが日付けを間違えたのか。それとも彼女が間違えたのか。

それからさらに十分。もう約束の一時を四十分も過ぎてしまった。ぼくは何だかバカにされたような気がしてきた。彼女の家からここまで歩いたって三十分とかからない。たぶん忘れたか、何か用事でも入ったのだろう。

もう一つの可能性については考えくなかった。だって、誘ったのは彼女なんだから。ぼくは諦めて一人で博物館を見学することにした。ちょっとブルーだ。

～以下略～

---

久保はてなの作品は私小説的なものが多かった。背景や流れを丁寧に書く点は力量を感じさせた。

ところで、当時スマホはなく、携帯も高校生には普及していない。むしろポケベル全盛のころだ。

現代ならこういうすれ違いは発生しないだろう。電話して「どうしたの？」と聞けば済むからだ。もはや相手を待つわくわく感と来ない不安が書かれることはない……。若き創作家たちはどう描くのだろう、などと考える老創作家である(^\_^;)。

## [ 3 ] 小説の三要素

3学期に入ると文字スケッチを離れ、いよいよ本格的な「小説(的文章)をつくろう」ということで、まず7「ある～時、ある～所に、おじいさんとおばあさんがいました」を冒頭に「物語」をつくる——課題を設定。

例の「むかしむかしあるところにおじいさんとおばあさんがいました～」で始まる物語だ。

【ここで冒頭の「昔々あるところに1人の顧問と10人の文芸部員がいた～」が伏線だったことに気づかれたかどうか。ぼーっと読んでいる人は気づかない。】

この課題からはかなり面白い作品が生まれた。

3作冒頭を紹介する。まずあべさやさん「腐った、桃太郎の話」

### 腐った、桃太郎の話

あべさやさん

昔昔、ある村に、お爺さんとお婆さんが住んでおりました。

よく晴れた日のことでした。お爺さんは山へ首吊りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。

お婆さんが川で洗濯をしていると、大きな桃がドンブラコッコ、ドンブラコッコと流れてきました。お婆さんは何のためらいもなくその桃を家に持ち帰りました。しかし、お爺さんはなかなか帰ってきません。(何故でしょうか? 答えは山に行けば分かるはずです。)

一日が終わってもお爺さんは帰ってきません。でも、お婆さんは桃を切らずにお爺さんの帰りを待ちました。

二日目、お爺さんは帰ってきません。でも、お婆さんは桃を切らずにお爺さんの帰りを待ちました。

三日目、 前と同じ。

四日目、 前と同じ。

.....

そんなこんなで一ヶ月。お婆さんはふと「あれ、なんかおかしいな」と思うようになりました。そう思いながらもお婆さんは、桃を切らずにお爺さんの帰りを待ちました。愛の力ですね。

～以下略～

この後5年経ってお婆さんはやっと桃を切る。だが、包丁ではうまく切れなかつたようで、「力任せに思いつきり鉈で桃を切り(割り)ました。中から血が、流れてきました。

そして、すっかり腐ってしまった<sup>お</sup>男の子が出てきました。お婆さんは『あらあら、頭から血が…』と言って、針と糸で、その男の子の頭を縫いました。』と続く。

はちゃめちゃな作品だが、パロディーとして面白く、衝撃度において抜けていたので、98年文化祭冊子『百八煩惱』の巻頭に置いた。

### 続いて風いなさ「雪狼」

---

ゆきおおかみ  
雪 狼 風 いなさ

昔々、北にある小さな町におじいさんとおばあさんがいました。

二人が暮らす街の北にはモミジやマツといったような針葉樹の森が広がり、その森を抜けると見わたすかぎりに草原が北の果てに向かってどこまでも続いていくでした。

老夫婦の住む家は森を背にした街の外れにありました。家のまわりには畠があり、春から秋にかけて野菜や果物などのいろいろな作物を育てては収穫し、自分たちが冬のあいだに必要な分だけを残してあとは町の八百屋に売りました。

二人は一所懸命に働いたので作物は収穫の時期にはどっさり実りましたし、老夫婦の育てた野菜や果物はよく売れたので、八百屋も喜んで二人の育てた作物を買ってくれるのでした。そのお金で必要な分の肉や魚やその他の日用雑貨品を買い、あまつたお金は何かのときのために大切に貯めておきました。

変化や刺激とは無縁の毎日でしたが二人は満足でした。老夫婦には子供がいましたが、何年か前に独立して今では別の町で暮らしています。おかげで子供の心配をすることもなく、今の生活に不自由を感じることもありません。

近所の子供達が何人かで遊びに来ることもあります。そうなるといつもは静かな老夫婦の家はてんやわんやの大騒ぎになります。二人は子供が大好きだったので、やつて来る子供たちを大歓迎しました。

おばあさんは腕によりをかけておいしいお菓子を作ります。いろいろな形をしたクッキーや甘いにおいのするアップルパイ、特製のシロップをかけたホットケーキなどがココアや紅茶といった飲み物といっしょにテーブルの上にならびます。

～以下略～

---

ここはまだ事件が起こる前の情景描写だが、15歳とは思えない丁寧な描写が続く。舞台は北欧、やがて雪が降り白夜となる。子どもたちは雪合戦などを遊んだ後いつものように老夫婦の家に行くと……恐ろしい出来事が起こる。

この作品は起承転結も整ってすでに成熟した作家のおもむきがあった。風いなさは地の文をしっかり書ける点でスパ抜けていた。

### 最後に大根鉄斎「ある殺人」

---

## ある殺人

大根鉄髭てつぜん

## プロローグ

二十世紀からしてみれば遠い未来、二十二世紀のこと、ある浜にお爺さんとお婆さんの死体が打ち上げられました。

その死体を見て警察はすぐさま他殺と断定しました。二つの死体の顔には明らかに銃で撃たれた痕があったからです。それも一つや二つではなく、もともとこの二人がどんな顔をしていたのか、それすらもわからない、そんな具合なのでした。警察は死体を、手に刻まれた皺の様子から老人、結婚指輪をはめていたことから夫婦と判断し、老夫婦殺人事件として捜査をしています。

しかし、二十二世紀の操作技術をもってしても、犯人は捕まっていないのです。おそらく、この事件の真相をマスコミがつかんだならば、その後三ヶ月位は人々の話題を独占するでしょう。そのくらい、この事件は魅力的で興味深く、そして、異常なのでした。

この文章を書いているこの私は犯人を知っています。犯人が一体どんな人間で、何の因果で殺人を犯すに至ったのか、知っているのです。……でも、私はこの事件のことをマスコミに知らせるつもりはありません。

～以下略～

---

この冒頭は「昔昔～」ではなく、「二十世紀からしてみれば遠い未来、二十二世紀のこと」と近未來の「When」から始まっている。Where（どこで）、Who（誰が）も入っているので全く問題なし。

【ここで突然の英文字出現。「伏線かあ？」とつぶやけるか。】

大根鉄髭は創作家と言うより哲学者タイプで論理構成のしっかりした小説が書けた。この作品も短編ながら、「プロローグ」とあるとおり、この後第一章から第四章まで分かれ、起承転結の整った小説だった。

次いで 10 「現代都市をテーマに『絵本』をつくる」課題を設けた。

絵本は幼児向けではなく高校生向けというか「現代都市をテーマにする」との条件をつけた。さすが画像づくりがうまい現代高校生らしい秀作が相次いだ。

これも 3 作紹介しよう。文字部分は(途中の 1 行空きを含めて)全文掲載した。

【フロッピーディスクの画像を読み込めず、絵を掲載できないのが残念。】

課題「現代都市をテーマに『絵本』をつくる」  
最初に姫藤ざくら「マカ不思議」

---

## マカ不思議

姫藤ざくら

現代——。

汚れた空気は人間や動物、自然に危害を与えています。

次の場合も……

ある日、動物園の隣に工場が建ちました  
その工場から出る煙のせいで、  
動物園の動物たちは、弱っていました。

これを知った少年が一人。

動物園にのりこんで檻を開けまくり、動物たちを逃がしました。

……数分後、動物園の飼育員たちが  
非常事態に気付き、警察を呼び、  
少年を説得しようと試みました。

少年と飼育員+警察の戦いが始まりました。

「なぜ、こんなことをするんだっ」

「隣の工場のせいで、動物たちがあんなに弱っているつ」

「だからといって、無差別に解放することはないだろうつ。」

見なさいつ。ライオンがしまうまを襲っているではないかつ」

「弱肉強食は、自然のきまりだから、いーのさ」

しつこくつきまとう、飼育員+警察たちに腹を立て、  
少年はコアラを人質にとり、ナイフをつきつけ、  
動物たちを元に戻してほしかったら、  
隣の工場を壊すよう命じました。

飼育員たちが、

オーストラリアとの貿易に支障が出たら……

などと考えてもたもたしているうちに、

少年はどうとうキレイ手りゅう弾を投げつけました。

『ちゅどーん！』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

こうして少年は無事、動物を救助しました。

めでたし、めでたし。(了)

少年はどうやって檻のカギを手に入れたのか。なぜ手榴弾を持っているのか。

そんなことはどーでもいい。「弱肉強食、コアラを人質」のところでは大笑いだった。

たどたどしい感じの(へたな)絵も内容にマッチしていた。私は「姫藤ざくらの最高傑作だね」と評価したものだ。

続いて異可屋竜巻「こんなにすばらしい都市」

# こんなにすばらしい都市

い　か　や　たつまき  
異可屋竜巻

パルルルル 駆け込み乗車はご遠慮下さい。  
ドアが閉まります。プシュウ。 ガチャ  
おはようございます。7時のニュースをお伝えします。  
この後昼頃から夜にかけての天気は……

ピュルルル！ カチャ、はい、あ、どうも。  
いつもお世話になります。え、いまでですか？  
東京駅ですが。あ、はいすぐに参ります。  
失礼します。ピ  
おーいタクシー！！！

なんかオモシロイコトないかなー？  
そういえば、向こうのクレープ屋おいしいって。  
行ってみようよ。 [注…絵はルーズソックス(!)の女子高生二人]

番組を中断してニュースをお伝えします。  
今日未明、横須賀港に停泊中の米国空母に  
核ミサイルが搭載されていることがわかり、  
政府は、防衛庁に………

バカモン！ 消えましたで済む問題か？！  
だからいつもフロッピーに保存しろと言ってるんだ！  
ハードディスクなんか二度と使うな！  
やれやれ無能な部下がいると苦労するよっ。

クソ、今夜も残業か。  
タヌキオヤジのヤツ、オレを殺す気だな！  
あの店のママ、なかなかセクシーでねえ。  
どうです今晚、行ってみませんか。

お客様、終着駅ですよ。

[注…絵は終電らしき電車。窓の外は暗く  
ビルの明かり。一人座席の端でもたれる影]

あなたはどう思いますか。この都市を  
あなたはどう思いますか。この生活を  
それでもすばらしいんです。この都市は

都市は生活の基盤です。

都市はすごいところです。  
都市はにぎやかでなくてはいけません。  
都市はこうでなくてはいけません。

----- 現代都市でした。(了)

今ではほとんど死語の「フロッピーディスク」。当時の保存媒体で、その後U S Bメモリーに変わった。ルーズソックスも死語になった。

異可屋竜巻は画像作成が得意で、かなり個性的な絵を作成した。私は「都市の断面をうまく切り取ったな」と評価したものだ。

ちなみに、ペンネーム「いかやたつまき」は彼の本名を並べ替えたアナグラムである(と卒業後に知った)。推理小説好きは本名に挑戦してみてほしい(^.^)。

最後に海堂聖「孤独な樹の物語～Story In Dark～」

孤独な樹の物語～Story In Dark～

海堂 聖 ひじり

Schwarz Wald(シュヴァルツ バルト) 一黒い森—

そう呼ばれる場所に、彼は立っていました。

彼の脚は、地面の深くに埋もれて

どんなに望んでも、どんなにもがいても

決して動くことはできませんでした。

何かを求めて旅立つことを、

天に許されなかつたのです。

[絵は葉が茂る1本の樹木]

彼はこの場所でただ一人長生きでした。

だから彼は

独りぼっちでした。

[絵は真っ暗な背景と三日月の下、幹がかすかに見える木]

かつてここには

彼の仲間が、彼と共に生きていました。

たくさん、たくさん。

彼は独りぼっちではありませんでした。

語りかければいつも

誰かが答えてくれました。

けれどいつの間にか、

彼が何度も呼びかけても

誰も答えてくれなくなりました。

いつからか降ってくるようになった毒の雨に

彼らの命は

奪われていったのです。

[絵は計5本の樹木]

彼はこの場所でただ一人長生きでした。

だから彼は  
たくさんの仲間が傷つき死んで行く様を  
一番多く、見届けました。

そして  
決して永遠ではない彼の命にも、  
終わりの時がやってきました。  
ずっと許されることのなかつた悲痛な願いを  
ついに天は、聞き入れたのです。

[絵は一本の木に降る雨]

彼はこの場所でただ一人長生きでした。

だから彼は  
一人、ひっそりと逝きました。  
彼に挽歌を贈る者は、  
冷たく静かな風だけ……。

[絵は木が消え薄暗い中降る雨]

誰も知らない森の物語は  
誰にも知られないまま  
結末を迎えます。  
虚空に鳴る冷たい風は  
今も、  
あの場所で吹き続いているでしょう。

Schwarz Wald(シュヴァルツ バルト) 一黒い森一 で……。(了)

[絵は暗い夜空にいくつかの星]

---

海堂聖は部員中唯一詩を書いている人で、この課題も詩的雰囲気が感じられる。  
私も学生時代に詩や短歌をつくったけれど、批評はさすがに難しく、彼女にとって  
は物足りない顧問だったろうな、と振り返って思う。

そして、一年最後の課題が 11 「源信作『往生要集』を参考に現代版『地獄物語』」  
をつくる。『往生要集』の地獄編をいくつか紹介して各自現代版地獄物語を作成した。  
これは結構関心を持ったようで、長短合させて面白い作品が出来上がった。  
一つ作品を紹介する。

課題「現代版地獄物語をつくる」

---

天国にもう一度平和を！

稻葉マー坊

——冥界、そこは死者が第二の人生を送るところ。現世での記憶は残るが名は変えられ、閻魔大王に天国行き、地獄行きと分けられる。

現世で普通に生まれ、普通に育ち、普通に生きて、普通に死ねば、普通の天国に行ける。そして、特に現世で世界を救うようなことをした者は『神界』という世界で、神の下で働くという名誉が与えられるのだ。

地獄には現世で殺人や窃盗、強盗、強姦などの罪を犯した者が行く。罪の重さによって小地獄、中地獄、大地獄があり、特大地獄に入った者は、『無(存在自体が消されるとしても重い罰)』にされてしまう。

——神界、そこは神や神に仕える『導士』が住むところである。神は四人いて『四神』といい、偉い順に、全てを治める総治神、命ある物を治める命治神、冥界、特に地獄で起こった争い事を消す争消神、天界外の世界を治める外治神がいる。

今回の話は、争消神の下で働いている、導士の話である。

地球の太陽暦で 2103 年、天界は大きく荒れていた。天国の人が突如消えたり、可愛い女の子が地獄に吸い込まれていくのだ。これを知った四神は一人の導士を呼び出した。名前は孔関剣師。導士の中で一番の剣の使い手である。

「孔関剣師よ。ちとお前に頼みがある」

争消神はゆっくりとした口調で話した。

「ここ数十年で天国は最大の危機に陥っている。天国の住人が次々と『無』になってしまい、美女達は地獄に吸い込まれてしまうのだ」

争消神は二枚の写真を見せた。

「犯人は分かっている。中地獄人の宰混勝さいこんしょう と大地獄人の黄倉徵晒こうそうちょうさい だ。宰混勝は不思議な妖術を使って、美女をさらっているのだ。黄倉徵晒も不思議な妖術を使って天国の人々を『無』にしている。そして、『天破自神教』という宗教を作っている。」

～以下略～

---

この後「孔関剣師」と地獄の戦士二人が戦う。そこは迫力があってかなりの表現を感じさせた。

ただ、稻葉マー坊は書きながら我を忘れて作品世界にのめり込むようなところがあり、しばしば伏線を忘れた。

ある作品ではラスト数行で正義派の主人公が危機に陥ると、今まで全く登場しなかった「味方」が突如現れて主人公を助ける。「おいおい、伏線張るんだよ(^.^)」と注意したもんだ。

ここで秘話その 2。

以前 [私が 97 年の文芸部新入生に対して[課題→実作→合評]の活動を提起した(深い)理由を推理できる方は探偵小説が書けるのではなかろうか(^\_^\n)]と記した。

文芸部新入生に対して[課題→実作→合評]の活動を提起した(深い)理由とは何か。

私はそれまでいくつか小説を書いていた。それを文芸誌の新人賞に投稿しても、自

分が選者なら間違ひなく没にするだろうと思った。

これは「紺屋の白袴・大工の掘っ立て」に似て「評論家は小説が書けない」とでも言うべき如意。小説をあれこれ批評できる——すなわちあれやこれやと批判できるけれど、「あなたはさぞかし誰からも批判されない名作を書けるのでしょうか」と言わざると困る……ってやつだ(^\_^;)。だから、一度も投稿したことがなかった。

具体的には構想、表現力の拙さはもちろんのこと、何より内容が古臭いというか、昭和の私小説風作品ばかりだった。簡単に言うと現代とは無縁、特に十代の少年少女とは完全に無関係。しかも未完が多かった。

そこで部員に与えた課題を顧問自身も書こうと思った。

できる限り彼らの文体をまねる。高校生の発想、感性、表現を取り入れた作品を書く。そして、合評の作品の中に何食わぬ顔でまぎれこませた(^\_^;)。

【ここで冒頭の著者名「元顧問 御影祐 1名 と 文芸部員 10名」にわざわざ「1名」をつけた理由がおわかりいただけたと思う。直後「11人の文芸愛好家」とあるのも伏線だった。】

文化祭後部員は10人となったので、作品は11作集まる。

作成、合評の手順は以下のとおり。

各自フロッピーディスクで課題作を提出し、私はそれをランダムに配置して印刷する。当初は一人一人プリントアウトさせていたが、枚数が増えると教員用の印刷機を使ってザラ紙に印刷した。それを綴じると、簡単な冊子ができるので、部員は合評1、2週間前に作品を手にする。

合評は放課後2時間ほどで行い、終えると作者を明かしたので、部員は私も課題作を書いたことにすぐ気が付いた。

作者名が明かされると「やっぱり…」の言葉が漏れることがあれば、「意外…」と驚かれることもしばしば。

私を入れて男が5名、女子6名だった。男女どちらが書いたか判別できない作品も多く、合評は作者を推理する楽しみもあった。私の作品が「先生とはわからなかった」と言われたときは「してやったり」の思いであった(^.^)。

部員に未完を許さなかったのも、自分自身に作品を完成させる癖をつけようとの思いだった。

## [ 4 ] 文芸部 2 年目の活動

98 年 4 月、文芸部 1 年生 10 名は全員 2 年に進級した。

そして入学式、翌日部活紹介のオリエンテーション。

部員はぜひ後輩を加入させたいと意気込んでいた。

が、私は内心「これ以上増えないでほしい」と思った。

当初原稿用紙二枚程度に留めていた作品はどんどん枚数が増えていたからだ。1 年最後の「現代版地獄物語をつくる」課題では数十枚の作品さえ出現した。

私は 10 人分の作品の誤字脱字、表現、内容の良い点、悪い点などを書きこんでいた。作品を二度は読んだので、批評にかなり時間を要するようになった。学校内の時間だけではとても足りず、合評直前は帰宅後数時間を使うこともあった。妻子がいてはとてもできなかっただろう。

部活説明会には新入生が数人來たようだ。もちろん部長・副部長は「自由に書いていいけど、課題、実作、合評でやっている」ことを説明した。

結果……一人も入部しなかった。女子部員はかなりがっかりしたようだ。

逆に私は「ラッキー」てなもんである(^.^)。2 年生だけに集中できるからだ。

2 年目に設定した課題は以下のとおり(末尾は実施月)。

### [ 2 年時 (98 年度) 課題 ]

- 1 自由作 4 月
- 2 「公園」を描く(男女ペアになって学校近くの公園を散策) 5 月
- 3 「丸木美術館」を描く(埼玉県東松山市「丸木美術館」訪問) 6 月
- 4 夏休み合宿——連作小説をつくる 7 月
- 5 「さみしさ」をテーマに小説を書く(文化祭文芸誌統一テーマ)
- 6 「修学旅行(北海道)」を描く 10 月
- 7 夏合宿の連作小説を「自作」として完成させる 11 月
- 8 「変身譚—花びらかまきり—」(花びらカマキリのビデオを参考に変身譚をつくる)

99 年 1 月

※ 「百八煩惱」を県高校文芸誌コンクールに応募、99 年 1 月県教育長賞受賞

4 月の「自由作」はいつも課題ばかりでは、とガス抜きのつもりで設定した。

自作のある部員はもちろんそれを提出した。意外だったのはこのときが初めてという部員も何人かいたこと。平均するとひと月一度の課題だったから、それをこなすだけであっぷあっぷだったようだ。

それから 2 「公園を描く」、3 「丸木美術館を描く」、4 夏休み合宿は校外活動なので、校長の許可を得た。3 と 4 はもちろん保護者に趣意書を出して了解を求めた。丸木美術館には丸木夫妻の「原爆の図」がある。

Y東西高校の修学旅行（9月末）は1年時生徒へのアンケートによって最多の方面になる。だいたい北海道か中国の広島・岡山、九州北部の福岡、佐賀、長崎が多かった。広島、長崎の場合は必ず原爆資料館を見学する。

この学年の目的地は北海道になったので、原爆資料館に行くことはほぼない。在学中一度は原爆について感じ、考えてほしいと思って丸木美術館見学を取り入れた。

【この課題の中に伏線の回収があることに気付かれたかどうか。

1学年の12月「博物館を描く」課題のところで、以下のように書いている。

——中は一人一人ばらばらで見学のところは「当たり前の細部描写」と思われたかもしれない。だが、これは敢えて書いている。つまり、伏線と見抜けるかどうか、読者への挑戦である。「どーしてこんな自然のことを書いたのか」とつぶやき、「もしかしたら伏線かあ」と推理する。後に出てきたとき「やはり『一人一人ばらばらで見学』は伏線だったか」とつぶやける(^.^)と。

2年5月の課題「公園を描く」は(男女ペアになって学校近くの公園を散策)とある。つまり、「博物館を描く」は一人一人ばらばらで見学したが、「公園を描く」では部員を男女のペアにして歩かせたということである(^.^)。】

課題「公園」を描く(男女ペアになって学校近くの公園を散策)より2作紹介する。

まず姫藤ざくら「ミルクティー」

### ミルクティー 姫藤 ざくら

今、私たち文芸部員は部活の活動場所にいる。今回の課題はクジで男女のペアをつくり、その二人で公園をまわって、そのことを書くというフザけたものだ。ん~しかし、どーせならお目当ての彼と当たりたい。なんでかは分かんないけど、なんとなく…。

しかし、その彼と当たってしまったのは私の親友だった。ちくしょう、こうなったら二人の会話を録音してやる。私は机に置かれている彼女の鞄にこっそり、自分のヘッドホンステレオを入れた。彼女と私は同じ鞄なので、入れ間違えたことにすれば…おかしくはない。

ところで私とペアになった奴はけっこう扱いやすそうだ。フフ…とことん振り回して(?)やるぜ。私は隣にいるペアの男に言った。

「私は、私の見たい所にだけ行くから」

ペアの男は、

「ええー?」と、少々困惑気味に言った…が、私は気にせず公園へと向かった。

ペアの男は後からのろのろついてきた。

～以下略～

部員の中で唯一姫藤ざくらだけが当日のそのままを素材として書いていた。顧問の

思惑と違つてこの企画にうんざり気味だったことは残念だが、その気持ちが的確に表現されている。ペアとなった男子生徒の弱々しい感じも数行で描出した。

そして、友人と「お目当ての彼」との会話を盗聴しようとしたり、作品ラストはヘッドホンステレオを取り戻して会話を聞くところなど、フィクションが混じっている。わずかな枚数で「悪意を抱えた問題児」を描いた点は「大したもんだ」と評価した。

続いて規元和己「ドア…」

---

ド　ア　…　　規元　和己

私は何をしてるのだろう。

ここは、私の家から歩いて十分くらいのところにある公園。昼間や休日は子連れの家族や子供たちが遊びに来ている。芝生広場やアスレチックなどもあって結構広い。でも今は夜中、真っ暗な中に薄明るく灯る電灯の下に私はいる。大して明るくもないけれど、それでも光のない暗闇の中に一人立っているよりは安心できる。

もう、帰ろうか。

ここに来てからもう十分くらい経ったけれど、誰か来そうな気配はない。だいたい来るかどうかかも分からぬのに、待っているのもばかばかしい。何をしているんだか、と思って自分のしていることに笑えてきた。

何だってここに来てしまったのだろう。事の始まりは一通のD・Mだった。

学校帰りで、私はいつものようにポストを開けて中に入っているチラシをつかみ取ってアパートの階段を昇った。

ここに引っ越してもうすぐ二年。大学に通うため、私は神奈川県のJR沿線にある、駅から歩いて二十分ほどのアパートに越してきた。実家は千葉にあり、無理をすれば通えないこともなかった。しかし、神奈川県にあるキャンパスまで通うのはつらいだろう、そう思って越してきたのだ。

～以下略～

---

こちらは企画場所とした公園が登場するものの、全体は規元和己ワールドとも言うべき世界に連れて行く。

ちょっとSF的であり、不気味なストーリーがこの後展開する。「私」は届いた「D・M」の奇妙な言葉が気にかかる差出人の男と夜の公園で会う。現れた二、三十代の男は「福音会」という宗教団体の人間で「惣元」と名乗る。そして「ドア…」を買ってほしいと言う。ドアなんか誰が買うんだと怒る「私」に対して男は「ドアではない、[ドア…]であり、この[…]が大切です」と言う。何それと思うが、「ドア…」は広場の海賊船の船腹に立てかけられていた。

規元和己は登場人物の心理描写が鮮やかで、全体の流れを滑らかに描く点でも抜けていた。

この作品は県の高校生文芸コンクールで2位になった。「むべなるかな」と思ったものだ。

さて、ここから部員が想像だにしなかっただろう秘話その3を語りたい。

その前に98年の文化祭冊子統一テーマ「さみしさ」と掲載作品を紹介する。

テーマを「さみしさ」とした理由は以下のメッセージでわかると思う。

## さみしさ

世の中は いじめられたくない子どもたちであふれています でも  
いじめられたくない子どもが なぜ子どもをいじめるのでしょうか  
だから世の中はいじめられたくないのに いじめる子どもたちであふれています

世の中は やさしさを求める やさしい人たちであふれています でも  
やさしさを求める人が なぜ人にやさしくなれないのでしょうか  
だから世の中は やさしさを求めるのに やさしくない人たちであふれています

世の中は 爭いごとが嫌いな人たちであふれています でも  
争いごとが嫌いな人たちが 自分の利益に関わると なぜ争うのでしょうか  
国の利益に関わると なぜ戦争を起こすのでしょうか  
だから世の中は 爭いごとが嫌いなのに 争う人と国であふれています

世の中は 自分のさみしさをわかってほしいと思う人たちであふれています でも  
お母さんは 子どもは なぜお父さんのさみしさをわかってあげないのでしょう  
お父さんは 子どもは なぜお母さんのさみしさをわかってあげないのでしょう  
お父さんは お母さんは なぜ子どものさみしさをわかってあげないのでしょう

だから世の中は さみしさをわかってほしいと思うのに  
さみしさをわかってあげられない  
さみしーい人たちであふれています

【2025年に公表された小中高、特別支援学校におけるいじめの認知件数は約73万3千件。うち重大事態件数1306件。ほぼ30年経った今もこのメッセージが掲載できる（しなければならない）とは悲しいことだ。

さらに小中の不登校児童生徒34万6千人、高校6万9千人。彼らは「なぜこれをほったらかしにするの？」と叫んでいるに違いない。子どもが流す涙はいとも軽く扱われている……。】

前年と違って部員各自は文化祭のテーマに取り組み、力作が相次いだ。

以下98年『百八煩惱』に掲載した4作の冒頭を紹介する。

まず大根鉄髭「淋しさの列」

---

## 淋しさの列 大根鉄髭

割合小さな二階建ての家である。私は、いや、私とAはその家の二階にいる。八月のうだるような暑さにもかかわらず、私達のいる部屋ではクーラーも扇風機も動いておらず、窓も開けるどころか、厚手のカーテンが引かれてしまっている。部屋で目につく物と言えば学習机と、その上に置いてあるパソコン位のものだ。

私はこの家にただの一度だって入った事はない。目の前で壁を背にして座っているAについても、私は顔を見た事すらなかった。私が彼のことをAと呼ぶのも、彼の名を知らないからだ。私達は顔を合わせてから一言の会話も交わさず、もうかれこれ三十分も黙ったままでいる。

～以下略～

---

この後作品は衝撃的な展開を見せる。「私」は「遺書を書く手伝いをしてほしい」という不思議な電話を受けて「A」の家を訪ねる。そこには一冊ノートがあつて「自分が自殺した理由を書いてほしい」が、それは「あなたが自殺するとしたら…の理由だ」と続く。Aはすでに隣の部屋で自殺しているようだ。「私」がその部屋へ行くと……。

大根君渾身の掌編。テーマに真っ向からぶつかって現代社会の断面を見事に切り取ったと思った。表題も意味深である。

次に黒鴉ロカ「宇宙が泣くとき」(黒鴉ロカは白鴉リカの別ペンネーム)

---

## そら 宇宙が泣くとき 黒鴉ロカ

これは、後に多くの歴史家や詩人たち（一部の同人誌作家たちもだが）が魅了される戦乱の時代…ある傭兵団での日常の一場面である。

秋が七割、夏が三割といった、ある、曇り時々晴れのことである。

あまり大きいとは言えない傭兵団『黒陰蛾(カーヴィス)傭兵団』(お耽美な名前だな)は次の依頼者の城へ向かい、進軍中であった。と言っても傭兵団というのは戦争屋なわけで、だいたいいいつも進軍してるか戦ってるか宴してるか撤退している。しかも行ってすぐ戦になる依頼ではない(両者戦力強化中ということ)ので、進軍ものらりくらりといった感じだ。太陽がちょっと傾いたところで、もう宿舎の天幕を張っているところからも、それはうかがえる。

～以下略～

---

作品は時代不明の戦乱の世を生きる傭兵団の物語。主人公の「バリチェロ」は「誰かが悲しむのがいや」と思って仲間と打ち解けず、よそよそしく振舞っていた。

だが、分隊長の剣士「サロ」から「みんなお前が好きだぜ。だからお前が死んだらみんな泣くだろうな」と言わされてショックを受ける……と続く。孤独について面白い

考えを披露していた。白は現実、黒は空想世界、あるいは心の表と裏を意識していたのかもしれない。

次に規元和己「虚空」

---

## 虚 空 規元和己

彼は広い部屋にいた。

どこまでも広い、広い広い部屋。そしてそして同時に何もない部屋だった。全てが真っ白で、どこまで行っても白は白のままだった。

彼には、この部屋が広すぎてどこに壁があるのか、どこに入り口があるのかも分からなかつた。否、それが存在するのかどうかも彼は知ることができなかつた。彼の周りはすべてが白で、目に入ってくる物は白以外なかつた。地面と窓の境目すら分からぬ。

ここが部屋なのかどうかも判断するのは難しいようだ。と言うのも天井があるのかないのかも分からぬような状況で、外か中かを判断するのはほぼ不可能であるからだ。しかし、彼はとりあえずここの場所を中と定義したようだ。

「何もない外よりは、何もない四角い部屋の方が想像しやすいし、常識的だから」とのことだ。

～以下略～

---

「彼」は何者か、なぜ「私」は語っているのか、そんなことはどうでもいいと続く。やがて「彼」は白い部屋を歩き始める。そして、自分に影がないことに気付く。さらに歩いて「ドア」を発見。開ければ向こうは全て灰色の世界だった。「彼」はそちらに移ってまた歩く。その後「彼」と「私」は言葉を交わし始める。

テーマ「さみしさ」と関係なさそうだが、心象風景と解釈すればわからなくはない。不可解な感じを終始一貫させ、読者に「何だこれは?」と考えさせる点で評価できた。

最後に虚空子「分裂双想曲 第四楽章 『cure cure』」

---

## スキゾフレニー・デュエット 分裂双想曲 第四楽章 「cure cure」 虚空子

「美波、起きてるか？」

隣で静かな寝息を立てている彼女に、僕はそっと声をかけた。

それから、ふと気づいた。馬鹿だな、寝息が聞こえるのなら、起きているわけないじゃないか。

昨日の夜振り出した雨は、いつの間にか、朝露に紛れて消えてしまったらしい。午前六時、まだ薄い朝日が、ガラス窓からにじみ出る。

ベッドから降り、床に転がったままのウイスキーとカクテルの空き瓶を拾い、キッチンのくずかごに放り込む。蛇口から手のひらに水を落とし、飲み干す。

たったそれだけのことをして、僕は寝室兼書斎に戻ってみる。美波はまだ変わらない寝顔のままだったけれど、部屋にはもう、暖かい朝日が満たされていた。

～以下略～

---

一見(一読)、現実世界の朝の景色と思わせ、なおしばらく大学の先生らしき「雨宮」と「僕」との探り合いのような会話が描かれる。やがて夜の大学で「僕」と再会した美波は「自分は美波ではない。映像(ヴィジョン)だ」と言う……。ここらで古いタイプの人間である顧問はついていけなくなる(^\_^;)。

最終的に分裂しているのは「僕」か「美波」か「世界」か。ラストで「僕」はこぶしを(机か床に?)たたきつけ、「世界を壊すために、世界を壊すために、世界を壊すために」と三度繰り返される。作品のテーマは「さみしさ」と言うより「叫び」だなと感じたことだ。

前年文化祭から1年を経て部員の構想力、地の文の表現力は着実に成長していた。

他の作品も本稿にもっと掲載したいと思ったほどだ。

また、98年『百八煩悩』は県の「高校文芸誌コンクール」で最優秀にあたる「県教育長賞」を獲得した。手ごたえがあったので、望外でも不思議でもなかった。

閑話休題。4月に戻って秘話その3。

私は文芸部2年目にあたって「あること」を意識した。

それは彼らに部活動を通じて「青春」を体感させたいということ。

他クラブならいざ知らず、「ブンゲーブで? 一体どうやって?」と思われるかもしれない。

具体的に語る前に一つ青春論をぶちかましておく(^\_^)。

## [5] 地味イな青春論

あらゆる男女に子ども時代がある。あらゆる人に思春期が訪れ、男子はおちんちんに毛が生え、朝立ちと夢精が始まる。かたや女子は初潮が始まり、胸がふくらみ、月に一度血を流す。

おそらくそのころから青春が始まるのだろう。そして十代前半、後半を経て二十代末(か三十代初め)くらいに「青春が終わった…」と感じるのでないだろうか。

テレビドラマや映画に描かれた「青春時代」を見ると、高校や大学の部活動がよく舞台となっている。

たとえば、野球、ラグビー、サッカー、バスケ、テニス等々。友情は大きなテーマであり、チームワークを必要とする集団競技で部員が困難を乗り越え、夕日に向かつて走り叫ぶ……なんてことも(^.^)。

そして、男女のほのかな恋、片思いや三角関係の悩み。初恋が失恋に終わるのはよくある話。だが、成就するや天にも昇るほどの歓喜。

手をつないで歩き、一面の花の中を二人で駆け、海岸でじゃれ合ったりする……正直ちょっと恥ずかしくなるような映像(^.^)——を見て「青春ってあのようなものなんだろうなあ」と思い描く。

ここで使用された顔文字[(^.^)]を見て読者はどう思われただろうか。

それが青春だ、と思った人、さらにそのような小説、脚本を書いている方々は「この顔文字(^.^)は御影祐の皮肉だ、情けねえヤローだなあ」と感じた(かもしれない)。

一方、テレビや映画の青春を描いた表現は典型であり、ステレオタイプと感じている人は「これ(^.^)はトーゼンの顔文字であり、鋭い指摘だ」と思ったはず。

ステレオタイプとは勧善懲惡の物語が正に「典型」。正義の主人公と悪の帝王、その下っ端が戦う絵柄のこと。アメリカ映画に多い。

たとえば、「スーパーマン」に「バッドマン」、「スパイダーマン」。日本なら「ウルトラマン」に「仮面ライダー」、「スーパー戦隊」。

私が子どもの頃は「鉄腕アトム」に「鉄人28号」。「月光仮面」、「七色仮面」、「怪傑ハリマオ」、「白馬童子」……いくらでも書ける(^.^)。棒を刀にしたり、おもちゃのピストル、風呂敷を頭巾やマントにして大いに遊んだものだ。

S Fの名作「スターウォーズ」もストーリーは勧善懲惡(ただ、ルークとレイア姫がダースベイダーの子という構想は新鮮だった)。

日本ならかつての時代劇——遠山の金さん、將軍吉宗、大岡越前、水戸黄門など。現代なら明智小五郎、(金田一耕助の孫)金田一少年に名探偵コナン。正義はあくまで正義、悪はどこまでいっても悪という典型的物語。

私は授業の雑談で時折青春論を語った。

「ドラマや映画のように男女がお花畠や野原を駆けたり、海岸でじやれ合ったりするのが青春であり恋だと思っているとすれば、それは現実にはなかなか起こらない。特に初恋は……」と。

続けて「もちろん中には大きな三角関係や得恋があるかもしれない。だが、多くは振り返ったときにわかる、感じる。片思いに終わったあれが自分にとっての初恋だったとか。教室の隅で文化祭の準備中、ちょっと語り合った。そして、それで終わって発展することはなかった。あのときなぜかときめいてなんとなく楽しくて振り返ると切なくなる。あれが初恋だった、あのころが青春だったなあ」と。

この何とも地味な(^.^)青春論に同意してもらえるなら、ひそかに(あるいは堂々と?)創作家を志す少年・少女が「現在進行中の自分の青春や初恋」を書きたいと思ったとしよう。

それはほぼ不可能であると言わねばならない。「できないってことはないでしょう」と反論されるなら、一步下がって「とても難しい」と言いたい。

この理由を語る前に、もう一つ「小説論」について少々。

小説最大の特徴は何か？

こう問われるなら、私は「地の文」であると答えたい。

ほとんどの小説(物語)は会話と地の文に分かれる。

会話が登場人物の言葉を記すなら、地の文は(昔なつかし?)5W1Hが書かれる。

When (いつ)、Where (どこで)、Who (誰が)、What (何を)、Why (なぜ) の 5 W と How (どのように) の 1 H。

余談ながら、文芸部1年時に〈「ある～時、ある～所に、おじいさんとおばあさんがいました」を冒頭に「物語」をつくる〉課題を設定した。これは 5W1H の 3 点を初端から決めたことを意味している。時・所・人を小説の三要素と言う。

たとえば、「昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました」はこの1行だけで「いつ・どこで・誰が」の3要素を含んでいる。よって、あとは「What (何)」を「How (どのように)」描くかだけ。「Why (なぜ)」は書いてもいいし、書かなくても構わない。小説(物語)の訓練として最適の方法である。

部員に感想を聞かなかつたけれど、提出された作品を読めば、筆が進んだ——すなわち書きやすかったことがわかる。「小説の地の文の書き方」を体得できたのではないかと思う。

ちなみに、私は部員に会話部の書き方を指導したことは一度もない。原始時代から現代、未来。老若男女の人間に赤ん坊。野性動物やロボット、アンドロイドなど。登場人物(?)の会話は何を、どのように書いても構わない。

外国語は主述など構文がしっかりとしていないと伝わらない。が、日本語の会話は「何でもあり」である。

たとえば、「私はあなたを愛している」は英語では「I love you.」一つしかないが、日本語なら「あなたが好き」でも「好きだ。あんたが」でもいいし、「お慕いしています」から「惚れとうと」もある。よって、会話を書くのは難しくない。正にしゃべるように書けばいい。

だが、地の文をつくるのは難しいし、訓練が必要。文芸部で文字スケッチや体験を文章化する課題を設定したのはあくまで地の文を書く訓練だった。

### 閑話休題。

現在進行形の青春を描く際も当然 5W1H をきっちり書き込まねばならない。

これは難しいというより「めんどくせえ」と言うか、「そんな余裕はない」と言った方が正確だろう。

たとえば、あなたが泳げないとしてあるときあるところで水に落ち、手足をばたつかせて溺れかけている——。大変だ、緊急事態だ。「だれか助けてくれ！」と叫びたい。

これを 5W1H で言うなら、場所はどこか。海か川か池か、流れの急な水路か、足が底につかないプールか。もっと具体的に「都道府県は？ 市町村は？ 何月何日？ 地名や目印となる近くの建物は？」

なぜそこで落ちたのか。なぜ一人だったのか、いや、そばに誰かいいるのか……。

これらもろもろを語るのが地の文である。

みなさん方は緊急事態で警察とか消防に電話したことがあるだろうか。

警察だとまず「事件ですか、事故ですか」と問われる。こちらはどこで何が起こっているか——すなわち 5W1H を詳しく語らねばならない。

どこかの川で溺れかけて(辛うじて携帯・スマホを持って)いるとき、消防に助けを求める。そこで最低の 5W を語るなんて「そんな余裕はない！」と叫びたいけれど、どこで何が起こっているか——は伝えなければ、消防も警察も助けに来てくれない。

ゆえに、多くの場合通報するのは近くにいて目撃した人——ということになる。

### ここで一つ名言を提起しよう。

川や海で溺れないためには水泳の訓練をすればいい。

小中高では学校にプールがあって水に浮くこと、泳ぎ方を学ぶ。

だが、《青春や初恋という海は前もって訓練できない》。

それは突然やって来て……気づくと終わっている。

初恋が成就しないというのは有名な話だけれど、少年少女にとっては初の体験である。川や海で溺れているようなものだから、泳げず沈んだとしても不思議ではない。

そもそも青春の渦中にいても今の自分が「青春」だと感じない、わからない。言い換えれば、過ぎ去ってみないとそれが「青春」だと気づかない。

もっと言えば、過ぎ去ってやっと「ああ、あのころが自分の青春だった」と感じる。

すでに過ぎ去った読者各位なら、「確かに」とうなづいてもらえるのではないだろうか。

ただ、今の自分が「青春だ、初恋の渦中にいる」とわからなくとも、日記を書く習慣がある人は今起こっていること、自分の感情を日記に書き留めることができる。

では、この日記はそのままで小説になるか——と言えば、小説として読める作品にはならない。

日記をそのまま原稿用紙に転写すれば「私小説」になりそうだが、小説とは呼べない。なぜなら日記には 5W1H がないからだ。

日記の主人公は「私」であり、脇役として家族、友人、想いを寄せる人などが登場する。そのいちいちに 5W1H を付け加え、日記原盤を再構成、再構築して文章化しないと小説にはならない。

この作業は(先ほど書いたように)「しちめんどくさい」し、現在溺れているなら、その余裕はない。

その上私小説の弱点が露出する。それは自分の心理、感情は書けるけれど、想いを寄せる人の内面は書けない。相手が何を考え、何を感じているか。これは打ち明けてくれなければわからない。

ただ青春が——初恋が終わったか、終わりかけていると感じたときは、このめんどくささを乗り越えて書くことができる(かもしれない)。比喩的に言うなら、やっと海や川から脱出した。あるいは、足が底に着いてもはや溺れてはいない。

ところが……書き始めると最後にして最大の困難が襲来する。

それは自分の体験を小説化すると、書けば書くほど「これは自分の青春じゃない、自分の初恋じゃない」と感じることだ。

ここで最初の挫折が起こる。筆は進まず読み返してうんざりする。嫌気がさして書くことをやめる。

それでも書き続けてなんとかエンドマークを打つことができたとしよう。

自分が体験した青春や初恋を忠実に描けた——としよう。

できあがった作品を読み返してがっかりする。

それは映画やドラマやアニメのように波乱万丈、正にドラマチックな青春と初恋が描かれていないことだ。

先ほど書いたように、教室の片隅でちょっと喋ったことが自分にとっての初恋だった、3年間部活でがんばったけれど、大会で劇的な勝利をおさめることはなかった。

これを一言で言うと「地味いな青春、些細な初恋だった」。人に聞かせ、読ませるほどの作品ではない……(-\_-)。

かくして書いたけれど、プリントアウトされた作品は小箱に仕舞われる。フロッピーディスクの中に閉じ込められる。30年後フロッピーからそれを取り出そうしたら、今のパソコンでは読み込めない羽目になる(^\_^;)。

閑話休題。長々と青春、初恋、小説論を語った。

本稿として何を言いたいか。

当時文芸部1年後半から2年にかけて私が部員に仕掛けた罫。

それは彼らに部活を通じて青春と初恋(の雰囲気)を感じてもらい、現在進行形の青春小説を書いてもらいたいということ。

文芸部——のみならず創作活動は一人部屋にこもって想像世界を描くイメージが強い。現実世界と無縁である。残念ながら「それも青春」とは言いつらい。

やはり外に出て未知の人と遭遇し関係を持つ。集団の中で活動することで一人の異性にほのかな気持ちを抱く。ある女性(男性)をめぐってあるかなきかの三角関係に陥る……。

私はY高文芸部員に青春と初恋の舞台を提供したいと思った。

もちろんもう一点は私自身を一部員に託して同じく同時進行の青春、初恋を書くこと。

1年時私は文芸部の「ぼく」を主人公としてすでにこの試みを実行していた。

夏休みに書いた『透明な叫び』、そして「博物館を描く」課題の『失恋博物館』。

ただ、この2作はフィクションが多く、「ぼく」の私小説ではなかった。

## [6] ブンゲーブの青春

2年時の課題——以下2346が青春を体感するきっかけになってほしいとの思いで設定した企画である。いずれも部屋にこもってちまちま書く文章(小説)ではなく、外に出て二人、もしくはみなで体験する。それを描いて青春小説をつくろうと。

- 2 「公園」を描く(男女ペアになって学校近くの公園を散策) 5月
- 3 「丸木美術館」を描く(埼玉県松山市「丸木美術館」訪問) 6月
- 4 夏休み合宿——連作小説をつくる 7月
- 6 「修学旅行(北海道)」を描く 9月

10名の部員は女子が6名、男子が4名。だが仮想部員が入っているので、男子は5名。彼らはこの企画に顧問のそのような思いが隠されているとは思いもしなかっただろう。

私は部員がこれらの体験を「私小説」として描くことを期待した。同時進行の青春小説は私小説にならざるを得ないからだ。

そして、案の定〈青春の海の中で溺れたに違いない〉部員たちから、体験をそのまま描く作品は現れなかった。素材として取り込んだり、感想が書かれることはあっても、小説にすると現実世界から離れた。

【読者はここで「顧問の思いを部員に伝えたのか」と疑問を抱かれたかもしれない。

あるいは、当時文芸部員だった10名が本稿を読んだら「あの頃言ってほしかった」と思うかもしれない。

確かに私は「同時進行の青春小説を書いてほしい」との意図を話さなかった。なぜか。

理由は二つある。一つは彼らが○○○○だから。

もう一つは青春も初恋も人から指示され、強要されて行うものではない。身体の底からこんこんと、ふつふつと湧き出るものであり、ただひたすら、がむしゃらに邁進するものだから。】

以下私が一部員に託して書いた2・3・6の作品を紹介しよう。

課題2 男女ペアになって学校近くの公園を散策して「公園を描く」

\*\*\*\*\*

### 強制デートはルンルン気分

中間試験最終日、テストは午前中で全て終わった。高二最初の中間試験だった。ぎんぎんに勉強しただけあってぼくはかなり疲れていた。しかし、午後の部活動のことを思うと、期待と緊張で心はわくわくどきどきしていた。

と言うのは、この後文芸部恒例の「文字スケッチー公園を描くー」活動があるから

だ。普段だったら、ぼくにとっては苦手な課題で期待とか緊張なんかするはずもない。でも、今回ばかりはちょっと違った。

先々週第十二回目の合評を終えたとき、S先生から次の課題が発表になった。それは「公園を描く」——S先生考案の、絵の具ではなくペン（文字）でさまざまなものを描く活動だ。「公園を描く」は、昨年秋に実施予定だった。雨で中止となっていたのを、今回復活させたとのことだ。

ところが、先生は同じ「公園を描く」でも、今までと少しパターンを変えると言う。つまり、部員一人一人単独で公園を描くのではなく、「部員同士デートしながら……」（デートお？！　部員同士い？！）、「それも含めて公園での一時間描こう」と言うのだ。

部員連中はそれを聞いて「えーっ」とか、「ぎょえー」とか、かなり仰々しく叫んだ。ぼくももちろん叫びまくった。しかし、ぼくは内心ひそかに「ラッキー(^.^)」とつぶやいていた。

だって、これでお目当てのあの子と、堂々とデートできるってことじゃないか。先生はみんなの反応を見ながらにやにやしていたけれど、「ただし」と言った。「ただし、カップリングは公平を期して（？）くじ引きで決める」（……）と言う。文芸部員は十名でちょうど男女五人だった。つまり、五組カップルができる。

くじ引きでは彼女に当たると限らない。そう思ってぼくはちょっと(-\_-;)になった。しかし、考えてみれば、「デートして下さい」なんて、とても口に出せない臆病なぼくにとって、五分の一の確率でも彼女と二人だけで歩く絶好のチャンスが与えられたってことだ。これはやっぱり神頼みでも何でもしてラッキーチャンスにするべきだ。ぼくはそう決意した。

結局、みんないろいろ叫んでいたけれど、先生が出す課題には逆らえないから、その企画をやることになった。

かくして、今日午後一時きっかり、部員全員が昇降口前の中庭に集まった。部員は男子が五人に女子が五人。それぞれ何と言うことなく固まりになった。昇降口前の中庭には大きな欅の木が二本立っている。五月の爽やかな風が若葉をそよがせている。文句なし、五月晴れの一日だ。

職員玄関からS先生がにこにこしながら手に大判の封筒を持ってやって来る。どうやら封筒の中にくじが入っているようだ。

部員連中は妙に寡黙だ。普段ハイ・テンションな者も静かで、何かしらいつもと雰囲気が違う……と思ったのはぼくだけだろうか。ぼくもどっちかというと黙りがちだった。心中彼女に当たってほしいな、でもまあここまで来たらどうでもいいか……みたいに、いつもの弱気の虫も顔をのぞかせていた。ぼくはどうも失敗したり、うまくいかなかつたときの言い訳を先にこしらえる癖がある。

先生がみんなを見回しておもむろに口を開いた。

「まず、男女それぞれ順番決めのじゃんけんをする。封筒の中には1番から5番の札が入っているので、男女どちらかがそれを引いて相手を決定する」と言った。

そこで、男女に分かれてじゃんけんで順番を決めた。ぼくは最初に脱落して五番目になった。何と彼女も五番目だ。ぼくはこのままだったらしいのにと思った。だが、これからくじを引くから彼女に当たるとは限らない。

その後部長（男子）と副部長（女子）のじゃんけんで、封筒のくじを引くのは女子になった。

結局ぼくはもちろん、五番目の彼女もくじを引くことはない。残り物に福があるか。あるいはぼくが先に他の女子部員に当たるか。どっちにせよぼくは待つしかない。

「そうか。くじは五組分作ったけど、考えてみたら四組分あれば良かったんだな」なんて、先生はのんびりしたことを言った。

そんなことはどうでもいいんです。ぼくと彼女がペアになるかどうか、それが問題なんです、とぼくは心の中でつぶやいた。

一組目、一番目の女子がおそるおそる封筒に手を入れる。引いたのは「1」の札だった。当人たちは何だか静か。周囲もシーン。（ぼくはほつ……）

二組目、二番目の女子は「2」の札を引いた。二人は遠慮がちに「えーっ」と漏らす。

周りが「何だよ1—1、2—2じゃんか」と中ぐらいの盛り上がり。（ラッキー^\_^）

そして、三組目の女子。「まさか、3じゃないでしょうね」と言いながら引いた札が「3」。これは男女ともに「ぎょえーっ、げっげっ」と叫ぶ。

「何で、お前なんだよ！」「何であなたなんかと！」（と二人同時にののしり合った）

先生の「おいおい、まあまあ……それってかえって本命ってことじゃないのか」で、さらにぎやあぎやあ、わあわあ。（ぼくは仲間と笑いころげながら、やった（！）あと一つ、神様頼んますと祈った）

そして、運命の四組目。四番目の女子が封筒からゆっくりと札を取り出した。「あっ」と言って彼女は札を取り落とした。

ぼくは地面に転がった紙片の番号をしっかりと見届けた。「4」だった（そのときぼくは神様の存在を感じた！）。

またひとしきりぎやあぎやあ、わあわあ。しかし、これで決定。

「天にも昇る（↑）」気持ちってこういうことを言うのだろう。ぼくは内心の喜びを男連中に悟られまいと、しっかり抑えた。

ぼくと彼女の五組目決定は儀式も終わって付け足しみたいなもんだから盛り上がりはなかった。ぼくはその分妙な演技をしなくて済んだと思ってほつとした。

彼の方を盗み見ると、何だかつんとすまして隣の子と言葉を交わしている。ぼくと一緒にに行くのは嫌なんだろうか、なんて不吉な気持ちがちょっと頭をかすめた。

先生が「じゃあこれで決まったな。偶然とは言え、一から五まで同じ番号同士になるとはね。じゃんけんだけで良かったってことか」と言った。

いやいやそんなことはありません。このくじは大切でした、とぼくは心の中でつぶやいた。

…続く…

\*\*\*\*\*

6月は丸木美術館を訪ねてその体験を書く課題。

この学年の修学旅行は昨年生徒の希望により北海道と決まっていた。

もしも広島か九州長崎方面だったら、企画しなかったかもしれない。

### 課題3 「丸木美術館を描く」

\*\*\*\*\*

## 靈氣を発する絵たち

細い描線——。それはまるで素描のような絵だった。

黒い線と燃え上がる朱色の炎。そして、無彩色の空間。折り重なり、逆さになり、奇妙に曲がった人間の身体たち。赤い炎の中の女性と幼な子。水面に浮かんだ裸、裸、裸。女の死体をモッコに担いで運ぶ痩せた男。道ばたで呆けたように座る男、そして女。抱き合って泣いているかのような姉妹。赤ん坊を胸に抱いて見つめる女性。赤ん坊は死んでいるのか。あるいは母親がこと切れているのか……。全て物言わぬ人間たちの絵。

それはぼくを嫌な気持ちにさせる。絵の中の人間は大多数女性。そして、子どもと赤ん坊。女性はほとんどみんな裸だった。そこにはギリシア彫刻の滑らかな白、ルネッサンス絵画のしっとりとした肌、印象派絵画の明るくふくよかな裸、そんな人間の美しさは微塵もない。——部屋の壁全面に掲げられた計八双の屏風絵。それが「原爆の図」だった。

ぼくは嫌だった。なぜ大人はそれを強制する？なぜそれを見せたがる？ぼくらは戦争を知らない。原爆を知らない。それでいいじゃないか。「ヒロシマ」を、「ナガサキ」を、「原爆の図」を見ることによって、ぼくの中の何かは変わるのだろうか。変わりはない。先生が「原爆の絵がある丸木美術館を見に行こう」と言ったとき、ぼくは心の中で反発していた。ただそれだけのために、神奈川のS市からはるばる埼玉まで行くなんて、とぼくは思った。

そんなぼくの思いを大画面の絵たちはうち碎く。ぼくのうすっぺらな思いは絵によって蹴散らされた。等身大の裸像が屏風の中に貼り付いている。それは描かれたというより、まるで人がたが貼り付けられたかのように見えた。苦しみと絶望の声が聞こえてきそうなニンゲンたちの絵だ。

もちろん声が聞こえるはずもない。もしここにうめき声が流されていたら、作り物

だと思ってかえって安心したかもしれない。物言わぬ無音の世界だけに、息苦しい。絵たちはぼくを圧倒した。ぼくの気を碎いた……。

丸木美術館にたどり着いたときはもう午後一時近かった。六月第二土曜日。梅雨入りして早二週間。この日も冷たい雨が降っていた。東武東上線森林公園駅から一時間以上も歩き、土地の人に何度も道を尋ねながら、ぼくらはやっと丸木美術館に到着した。美術館は表通りの道からさらに入った、こんもりとした林の中にあった。

～以下略～

そして、7月夏休み中に合宿。文芸部が「合宿」なんて前代未聞のことかもしれない。

運動系の部活はサッカーや野球などチームワークを必要とするところは合宿できる。文系では吹奏楽なども合宿して朝から夜まで練習する意味がある。通学では全員そろわないことが多いからだ。だが、ひとりひとりただ書くだけの文芸部はチームワークと無縁だから合宿の必要がない。

そこで考案したのが連作小説である。かつて昭和の同人誌などで行われていた。

校長にかけあって「ワープロ教室で朝から夕方まで連作小説をやるので合宿した方がいい」として認めさせた。

小説執筆はワープロ室で朝から夕方までの活動。だから、合宿しなくてもできる。(教師以外の)読者は「よくまー認めてくれたなあ」と思われるかもしれない。

だが、他の部活にしても(体育館以外の)活動は朝から夕方までであって夜はできない。必要かどうかで言うと、運動系でも宿泊しなくていいクラブがある。

実は高校の合宿というのは夏休みの集中練習以上に「友情を体感、獲得する」意味合いがある。

放課後の練習では部員同士が家族や進路など深い悩みを打ち明けることは少ない。だが、一晩泊まれば、いろいろなことを語り合える。「実は好きになった人がいる」など思わぬ告白も出る。話が弾めば徹夜になることだってある。

意気投合したり、誰にも言えなかった悩みを打ち明けることで、やっと親友と呼べる人ことができた——こうした体験は自宅以外の所で泊まるから得られるものであり、合宿最大の効能と言える。

校長は当然このことを知っている。だから、私が「ブンゲープでも合宿したい」と申し出ると、「必要ないだろ」なんてことは言わない。二つ返事で「どうぞどうぞ」でなもんである(^\_^)。

幸いなことにY高の合宿はほぼ学校近くの国民生活センターで行われていた。学校まで歩いて来られるので、ワープロ室で執筆活動ができた。

夏合宿の件を部員の作品から抜粋する。

「連作小説」とは、夏休みの三日間、朝から夕方まで集中的に行われた小説制作だ。学校に部員全員が集まり、リレー小説を作った。部員十名全員参加して学校近くの国民生活センターに2泊した(朝昼夕の3食付き)。

そのときS先生が出した課題が例のごとく風変わりなものだった。「はちゃめちや系学校小説」だの「タイムトリップ系SF小説」、「ゲーム系冒険小説」、「純情コミック系恋愛小説」などとテーマが設定され、部員はくじ引きでそれぞれ分担を決めた。

まず各自が合宿初日までに冒頭1ページ分を書いておく。そして、前の部員が書いた後に続けてローテーションしながら、次の人が書き継いでいった。持ち時間は一人一時間半。結局完成まで三日かかった。

ワープロ室にはエアコンがない。暑かったし、決められた時間の中で、ストーリーが崩れないように書き継いでいくのはとても大変だった。中には話の流れを全く無視する者もいて、鬱鬱どころか非難ごうごうの時さえあった。

小説のラストは冒頭部の作者が再度分担できるようにローテーションを組んだ。途中経過は見ない約束だったので、最終的に自分に回ってきた作品は思いもかけない方向に進んでいることがあった。

するとまたそこでも最初の作者から非難の雨あられ。しかし、この企画はすごく盛り上がったし、結構みんな楽しみながらやっていた(^\_^)。

---

合宿は私の狙いでもある青春の体感場所。部員は夜男女混ざって語ることもあったようだ。もちろん午後10時までは許されている。だが、それを超えれば、不本意ながら叱りつけざるを得なかった。

宿泊棟は他の部活や一般の人も泊まっている。夕食後は各自部屋で過ごすことにして就寝タイムの午後10時以降は他の部屋を訪ねてはいけない——これは全体のルールだった。

だが、彼らはその後もひそかに集まっていろいろ語り合った。思わず声が大きくなれば、運動系の部活生徒が眠る部屋に漏れる。

当然のように顧問の私のところに「注意してくれ」と苦情が来る。私は出かけて行って「静かにしろ」ときつく注意した。

これも青春あるある。自分(たち)の世界に浸れば、周囲への配慮を忘れる。私は内心「青春してるな」と思っていた(^.^)。だが、彼らは注意する私を「理解してくれない大人」と見ただろう。

若者の自由を認めない大人の登場もよくある青春ドラマ。私はそれを演じたってわけだ。

## [ 7 ] 北海道、三度の偶然

最後に課題「修学旅行を描く」だが、その前に文芸部員しか知らない、とっておきの秘話を紹介しよう。

文芸部は男子が4名、女子6名。5月の「ペアになって公園を描く」企画は中間試験最終日の午後に実施した。私は最初のくじを作るだけで、公園散策に参加するつもりはなく、男女のペアを4組、ひと組は女子二人とする予定だった。

ところが、女子部員が一人「家の用事で参加できない」とのことでのことで、やむを得ず顧問を入れて男子5、女子5のペアにした。31頁「強制デートはルンルン気分」に描かれたくじ引きの様子はほぼ事実である。そして、5番目になった私とある女子部員とで公園周辺を一時間ほど散策した。終了後はもちろん文芸部員の「ぼく」に託して小説化した。

「強制デートはルンルン気分」——中盤は「ぼくと彼女」が二人並んで公園へ行き、芝生広場を散歩してベンチでいろいろ語り合う様子が描かれている。

その後は(末尾まで)以下のとおり。

\*\*\*\*\*

～中略～

この即席デートは一時間から一時間半という約束だった。ぼくは（遠回りになるけれど）公園の反対側の通りに出て、生活センターを一周して学校に戻らないかと提案した。彼女は同意してくれた。

ぼくらは先ほどの広場に戻らず、銀河アリーナ脇の道を辿っていった。そして、数分で公園から表通りに出た。今は全て葉桜となつた桜並木の通りを歩いて生活センターの方を目指した。このころになるとぼくはぎくしゃくした歩みから解放されていた。

歩道わきには鉄条網がある。その網に絡みつくように、きれいな紫色の花が咲いていた。茎は細い蔓状で、鉄柵や木にも絡みついている。

野生なのか植えられたのか、その花は数メートル間隔で見かけられた。花は大ぶりで、六つの花弁を水仙のように広げている。花は蔓の先端に色鮮やかに咲いていた。

ぼくはこんな花を見たことがなかった。

「きれいな花だね」

ぼくは立ち止まって紫の花びらを触りながら言った。

「それね、てっせん——て言うんだ」

彼女は花の名を知っていた。ぼくは彼女の物知りに感心した。

「てっせん？ どんな字を書くの？」

しかし、彼女も漢字は知らなかった。そして、この花が生活センターの周囲一帯に咲いていること、俳句をやっているおばあちゃんに聞いたら、「てっせん」と教えてくれたことなどを語った。

「不思議なんだよね、この花。秋でも冬でも春でも、一年中咲いている感じなんだ」

と彼女は妙なことを言った。

「そんなことないでしょ」と否定したけれど、彼女は間違いないと言い張った。

ぼくは口を閉ざしてまた歩き始めた。「てっせん」の花は生活センター外周の鉄柵でもしばしば見かけた。白い花弁のもあった。

そうしてぼくらは生活センターの正門前までやって来た。ぼくはこの辺りで何かしら唇が乾き始めた。心臓がどきどき高鳴っていた。

センターの角を曲がるともう学校の通用門が見えてくる。彼女は部室に寄って、ちょっと（ワープロを）打ってから帰ると言った。ぼくはこのまま下校する積もりだった。そして、ぼくらは正門近くで「さよなら」と言って別れた……。

ぼくは家路につきながら、ほっとため息をついた。高ぶっていた気持ちが急速にしぶんでいくのを感じた。ちょっと自分の不甲斐なさに腹が立った。心の中で思っていた一言を口に出せなかつたからだ。

ぼくはもしこのくじびきで彼女に当たつたら、「今度どこか二人だけで会えないかな」と言おうと思っていたのだ。

でも、まーいっか。即席デートで初っぱなからそんなこと言つたら怪しまれるしな、と自分をなぐさめた。

帰宅後すぐに辞書を引いた。「てっせん」の欄には「鉄扇」「鉄線」の二つの漢字しかなかつた。そして「鉄線」の項目に、

①鉄の針金、「有刺——」

②キンポウゲ科の多年生つる植物。初夏に、白または青紫の花を開く——とあつた。

「てっせんって鉄の線だったんだ」

思わず声が出た。ぼくは「てっせん」の漢字として「薔薇」とか「胡蝶蘭」のように、十数画の複雑な漢字か、神秘的なイメージの漢字を想像していた。まさか単なる鉄の線だとは思いもしなかつた。「てっせん」の細い蔓は鉄の線に似ていた。だから、その名が付けられたのかもしれない。

しかし、あの鮮やかな紫色の花と、彼女がつぶやいた「てっせん」の美しい響きに對して鉄の線とはあまりに落差がありすぎる。ぼくはしきりにそんなことを思った。

(了)

\*\*\*\*\*

作中「ぼく」が「今度どこか二人だけで会えないかな」と言おうと思った部分はもちろんフィクションだが、てっせんの花を見たこと、彼女が名を知っていたところなどは事実である。

部員はこの作品を読んで顧問が書いたとすぐに気づいた。合評では冒頭が緻密に書かれているとか、てっせんの花の部分など「いい感じ」と評価する声が出た。その一方、「はしゃぎ過ぎ」と批判的な言葉もあった。これは作者にとって嬉しい感想だった。些細にして地味な出来事を派手に描いたと言われたようなものだったから。

私は1年時の夏に書いた『透明な叫び』に続いて2年時の夏も文芸部員の「ぼく」

を主人公とする続編を書いた。『〇〇〇のヒロシマ』(〇〇〇には「ぼく」のペンネームが入る)と題したフィクションだが、「公園を描く」の企画以降、ほのかに想いを寄せ始めた女子部員を「マーヤ」として登場させた。

この続編はマーヤと「ぼく」が丸木美術館見学の刺激を受け、部員全員で8月6日に広島へ行こうとの計画を立てる。だが、それは大人に知られ頓挫した。結果顧問と「ぼく」とマーヤの3人で8月6日に広島へ行く。そして、平和記念式典に参加する——といったストーリーにした。

これも多くのフィクションだが、私自身はほんとうに6日の広島を訪ねた。平和記念式典の様子を私小説として描きたかったからだ。

そして、6日朝の記念式典に参加したので、その様子をかなり克明に描くことができた。よって、平和記念式典の部分は事実を書いた私小説であり、マーヤが関係する部分だけがフィクションだった。

広島には父と二人で行った。帰省後誘うと彼も「行こうか」と応じたので、広島一泊、その後二泊の小旅行とした。

父は母の死後かなり落ち込んでいたが、4月に開館した公営の温泉施設で受け付け兼雑用係として働き始めた。これが父の沈滯を一気に解消してくれたようで、彼は元気を取り戻した。

帰省直後の夕食で「今まで母ちゃんに早く迎えに来いち言うとった。今はしばらく来んでいいいち言うとる」と語るほどだった(^\_^)。

私が部員に託して執筆した作品は全て課題作でもあるから、印刷して部員に配布した。文芸部の様子や課題の件も書かれたので、作品はフィクションと事実が混在している。彼らはどんどん長くなる私の作品にかなりうんざりしたようだ。

ただ、作中の「ぼく」が想いを寄せる女子部員「マーヤ」とは「公園を描く」でペアになった相手を意識しているとわかる(そのように書かれていた)。

当時高校教師と女子生徒の恋が描かれるテレビドラマがあった。部員の中には「うちの顧問、あの子に惚れたんじゃないの」と噂することもあったようだ(^\_^;)。

これら「ぼく」が独白する、青春と初恋を同時進行で描く小説の総決算として「修学旅行」がある。私も副担任として北海道に行くので、引き続き「ぼく」とマーヤの物語を書くことができる。

問題は「ぼく」とマーヤの絡みが修学旅行では私小説にならないことだ。「公園を描く」の相手と顧問が北海道で二人だけになるとは到底思えなかった。

フィクションにするとしても困難がある。二人は同じ文芸部ながらクラスは違うし、札幌や富良野の班別自主行動も遭遇する機会はほぼない。敢えて構想するなら、「ぼく」もマーヤも班の仲間とそりが合わないことにする。単独行動厳禁だが、二人は札幌で班を離れ、勝手に一人で歩いた。ともに見たいと思って行ったのが北大のポプラ並木。そこでたまたま会った——と描くか。

さすがにちょっと作り過ぎの感あり。出発前、修学旅行の私小説化は無理とあきら

めざるを得なかった。

ところが、事実は小説より奇なり。案ずるより産むがやさし。行って見れば、まるで奇跡と思えるような偶然が発生した。

私は旅行中3度彼女と出会い、二人だけとなつた。

一度目は初日函館のトラピスチヌ修道院。二度目は夜景を見るため全員で出かけた函館山の頂上。どちらも彼女は班を離れ一人で歩いていた。これは全体行動なので単独でも構わない。私はたまたま出会って彼女と言葉を交わした。

そのとき私の内心は「これは面白い。青春と初恋の私小説が書けるぞ」と(大げさながら)欣喜雀躍であった(^\_^;)。

だが、2日目、3日目は予感通り二人だけになることはなかった。「もう一つ何かが起こってほしい」と思いつつ、班別自主行動の札幌で私は北大のポプラ並木を見に行つた。クラーク博士の銅像も見た。もちろんフィクションに備えるためだ。

そして、札幌から富良野に移動してPホテルへ。当時のホテルは小高い丘にあり、4階建てながら上部は三角形の面白い形をしていた。私は二人の教員と頂点の部屋になった。相方はもちろん男性だが、スイートルームのおもむきだった。窓から十勝岳と富良野の町が一望でき、白樺の木々や駐車場に止まるバスを見下ろすことができた。

明日は最終日。もはや彼女と二人になることはなく、「これで終わり。作品には北大のフィクションを付け加えるか」と思つて眠りについた。

すると、まさかの三度目が翌日早朝起つた。それは私小説として書くめどがついた奇跡のような偶然だった(^\_^;)。

以下課題6 「修学旅行(北海道)を描く」冒頭。

\*\*\*\*\*

## 北海道、それは美香の後ろ姿

……美香、もしかしたらぼくは……君を愛し始めたのかもしれない。

修学旅行の間、ぼくは君の姿を至るところで見かけた。なぜかふつと、君の姿だけが目にとまるんだ。最初は函館のトラピスチヌ修道院だった。ぼくらY高校二学年が乗った飛行機は9月30日昼過ぎ羽田を発ち、一時間半ほどで函館に着いた。7クラスはすぐそれぞれの目的地へ向かってバスに分乗した。ぼくと美香のクラスは2台のバスでトラピスチヌ修道院を目指した。

生まれて初めての北海道。でも、取り立てて言うほどのことはない町並みと道路。道の両側に植えられた高さ2メートル程の並木が、南天のような赤い実をたくさん実らせている。それが神奈川との違いを感じさせたぐらいだ。

バスは20分ほどでトラピスチヌ修道院に到着した。駐車場のすぐ横にも赤い実の木が並んでいた。よく見るとそれは南天ではない。何の木だろうと思った。さらにそ

の向こうには高くそびえる木が数本。上空へ斜めに真っ直ぐ伸びた枝。さわやかな薄緑色の葉っぱ。たぶんあれはポプラだ。

バスの外では中学生や高校生らしい修学旅行生がうじゅうじゅ歩いている。落ち着いた赤いレンガの建物がゆるやかな丘陵に数棟見える。ぼくらもバスを降り、ぞろぞろとガイドさんの後を付いていった。暖かさの中にかすかに冷たい空気がある。函館は初秋の気候だった。

ぼくらはガイドさんの案内で修道院の門をくぐった。ちょっとした広場に出る。正面にミカエルの銅像。その前には集合写真を撮る人々の固まり。右側に「いちい」の木。向こうの山腹にマリア像とそれを見上げる修道女の像。ガイドさんがルルドの泉の話をした。

それから石段を上って行くと、小高い丘の頂上に着く。修道院の建物が横に立ち並ぶ。塔の上の十字架にジャンヌダルクの像。明治の半ば頃フランスから8人の修道女がやって来て、ここで修行を始めた。今も数十名の修道女が祈りと勤労の修行に励んでいる。——そんなガイドさんの説明を聞いた。その直後のことだ。

丘の上にもこんもりとした低木のいちいの木が一本あった。その近くでぼくが建物を見上げていると、美香、君が突然いちいの木の陰から姿を現したんだ。

ちょっと跳ねるような感じで君はそこに立った。それはまるで一瞬異国の方の少女のように思えた。でも、もちろんぼくが見慣れた制服姿の美香だった。

君のそんな登場の仕方はちょっとぼくの心をくすぐった。ぼくは「やあ」って言った。君は会釈を返した。君は班の仲間と離れて一人のようだ。ぼくはとうから班の連中とは馬が合わない。

ぼくらはちょっと言葉を交わした。「今度の部活の課題何だろうか」「S先生のことだから…」(彼も向こうの方にいた)「…修道女の心境を小説にせよ、なんかじゃないの」なんて会話を交わしながら、ぼくと美香は何となく並んで丘を降りていった。

美香は「さっきガイドさんが説明してたルルドの聖水の話。私のお母さんもルルドに行ったんだ。そして、ハンカチを濡らして持って帰った。そのハンカチ、今でも濡れているんだよ」と言う。「ええっ、嘘だろ」とぼく。「ううん、ほんと。今でも湿っているんだ」そう彼女は言い張った。美香が時折見せる頑固な表情で。

ぼくはそれ以上何も言えなかった。そして、丘を降りた所にある土産物の棟の前に「じゃあ」と言って別れた。これが修学旅行で偶然美香と二人だけになった一度のことだ。

ぼくはみんなより一足先に駐車場のバスに戻った。みんなが帰って来るのを待ちながら、赤い実の並木の側まで行ってみた。実は十数個が房のように固まって、緑の葉の陰でたわわに実っている。駐車場係のおじさんが柵に寄りかかって休憩していたので、「あの赤い実の木は何て言うんですか」と聞いてみた。

おじさんは「あれかい、ありやーナナカマドだよ」と教えてくれた。

ナナカマド……ぼくは何となく美しい響きを持つその名をどこかで聞いたことがある。しかし、現物を見るのは初めてだった。

「ナナカマドってこんな真っ赤な実がなるんですね」と言うと、おじさんはこんなことを語った。

「この実はこれから雪が降り出す頃、葉が散ってもずっと落ちないんだ。この辺りが白一色の雪景色になっても、赤い実だけは枯れずに残っていてね」

「鳥は食べないんですか」

「いやーどうも苦いらしくて全く食べない。ま、鴉が食べるものがなくなったら、食うって話だけど……」

ぼくはおじさんに礼を言ってまたナナカマドの木々を見回した。真冬深い雪の中に立つナナカマドを思い描いた。葉はなくなり、枯れ木となった枝に赤い実だけがくつきり浮き上がる。そして、冬の間ずっとその鮮やかな赤みを保ち続ける。北国の冬が何となく身に迫ってきた」

～以下略～

\*\*\*\*\*

【続きは(他の作品も含めて)御影祐のホームページに掲載しています。】

→ <http://mikageyuu.flier.jp/hatenakubo/kubohatenatop.html>

この作品は合評で波紋を呼んだと言うか、物議をかもした。

表題は本来「北海道、それはマーヤの後ろ姿」とする予定だった。

だが、マーヤではなくてちとまずいかなと思った。

冒頭の一文、「美香、もしかしたらぼくは……君を愛し始めたのかもしれない」は北海道で三度も偶然の出会いがあれば、「ぼく」は運命的な邂逅として恋を確信するに違いない。だから、この一文は入れないわけにいかない。

もちろん全て架空部員の心情であって「顧問が女子部員に恋心を抱いた」わけではない。

そして、トラピスチヌ修道院と函館山の件は顧問と当人しか知らず、三度目のこととは当の女子部員でさえ知らない。よって、これが顧問の作とわかつても、部員は二人の遭遇が全てフィクションと思うだろう。作品は「フィクションだよ」と念押しするつもりで、マーヤではなく「美香」に変えた。

ところが、「公園を描く」以来、部員は架空部員の作品がほぼ事実を描く私小説だと思っている。「もしかしたら三度の出会いはフィクションではないかも知れない」と推理したので合評は荒れた(^\_^;)。いろいろ良い点、悪い点を批評する中で「これってストーカーじゃん」と責める言葉さえあった。

作り物の小説であれば、ストーカーのことが書かれても別におかしくはない。だが、「ストーカーじゃん」の言葉には《それが事実なら「ぼく=作者」を糾弾する》響きがあった。

ちなみに、これは明治から大正昭和(戦前)の「私小説」が抱えた大問題でもある。

読者のみならず評論家も、作品に「私」とあれば、それはイコール作者であり、書かれたことは「全て事実であろう」と見なした。今となっては考えられないような読み方がなされていた。

確かに表題「北海道、それは美香の後ろ姿」とあるとおり、「ぼく」は遠くから彼女を見ている場面が多かった。函館山では一人で歩く彼女の後を追って下りのローウェーに乗り、降りてからまたま会ったかのような気配で言葉を交わしている。作者からすると、全て「初恋あるある」として描いた部分だが、部員はそう受け取らなかつたようだ。

そのうち三度の偶然は「事実かフィクションか」が話題となった——と言うか大きな関心を集めた。この段階では作者は明かされないので、顧問は知らぬふりを装つた。

が、当人は耐えきれなくなったようだ。

「いちいの木の陰から跳ねるよう出てくる妖精みたいな女って何だヨ、誰だヨ？」とか、「富良野の朝の日の出を一人見るなんて、一体どういう女なんだよ」と、やや自虐的に言い放ち、最後に「そうだよ。それはオレだよ！」と暴露してしまつた……。

冷静に眺めれば、合評が最も盛り上がつた瞬間だった(^\_^;)。

ここでY高文芸部員に(今になって)言っておきたいことがある。

2年の課題「公園を描く」から「修学旅行を描く」までの作品は架空部員の青春と初恋を描く私小説(?)であつて、顧問がある女子部員に恋をしたのではない。

もしもそうなら、私はもっと積極的に彼女にアタックすべく、卒業後「どつかで会わないか」と声をかけただろう(^.^)。

テレビドラマに限らず、高校教員が女子卒業生と恋に落ちたり、結婚することは私の知る範囲でも片手は数えられた。私もそれを狙っていたかは……ご想像にお任せしたい。

### 閑話休題。

今も書いた通り、2年の活動を通じて青春と初恋を同時進行で描く試みは、私の中では達成することができた。特に修学旅行で起こつた三度の偶然は最後を飾るにふさわしい出来事だと思った。

この後文芸部は夏休みの連作小説を自作として完成させた。3学期に入ると、「花びらカマキリのビデオを参考に変身譚をつくる」課題をこなした。

私は「○○○の遠い世界へ——マーヤの変身譚——」と題して修学旅行後の「ぼく」とマーヤを書いた。これは完全なフィクションで、マーヤの変身譚とあるようにS F作品だった。

→ <http://mikageyuu.flier.jp/hatenakubo/hatenasakuhin/hatenanotohoisekaihe.pdf>

冒頭 2 行は以下。

\*\*\*\*\*  
1999 年 1 月 31 日が近づいている。

あと 2 ヶ月。もう時間がない……。  
\*\*\*\*\*

時は 1998 年 11 月。地球が滅ぶと予言された前年。世界も日本もこの話題で持ちきりだった。

作品は文芸部の日常活動を描きつつ、Y 高にだんだん奇妙なことが起こり始める。顧問「堺羽根先生」の不可解な行動から、彼に異次元から来た科学者が取り憑いているとわかる。「神」の位置に立つサカイバネは地球滅亡をたくらんでいた。

……となるとちょっとありふれたお話(^\_^;)だが、若干ひねった。サカイバネは次元移動装置を使って地球から人類だけを異次元空間に追放するという構想である。

本性の花びらカマキリの姿を現したサカイバネは「ぼく」とマーヤに言う。

「私は四次元世界からこの三次元世界をずっと眺めてきた。そして、傲慢不遜なニンゲンたちをこの世界から追放することにしたのだ。私は三次元と四次元の狭間でゼロのゆがみを起こす。世界中のパソコンが連動して、ある台数が同時に作動すればそれは起きる。

来年 9 月 9 日 9 時 9 分 9 秒、その時刻にインターネットが繋がったとき、次元移動装置と連動して人類は全て異次元空間に追放される。この世界は人間以外の生き物だけとなる。百年も経たぬうちに地球の自然は回復するだろう」と。

本作のポイントはラストにある。三人は異次元世界に連れていかれ、サカイバネと対決する。結果次元移動装置の破壊に成功するが、元の世界に戻れなくなる。つまり、現実世界から「顧問とぼくとマーヤ」が消えてしまった……。

これが何を意味するか、おわかりいただけると思う。文芸部物語の「ジ・エンド」である(^\_^)。

---

#### (後記)

以前書いたように、私は文芸部員の卒業と同時に転勤、1 年後退職して執筆活動に乗り出した。

それまで自分の作品に全く自信がなく、未完に終わることも多かった。それが一部員となって同じ課題をこなすことで、作品にエンドマークを打つことができ、創作に自信が芽生えた。特に同時進行の青春・初恋を私小説として描けたことが大きい。

振り返れば、文芸部員 10 名との 2 年間はいくつもの偶然が重なっていた。

それまで 2 年間部員 0 だった文芸部に 10 名もの部員が——しかも男子が 4 名も集まつた。もしも女子だけ数名(当時これが多かった)だったら、「男女ペアとなって公園を散策する」企画は成立しなかつただろう。

また、97年4月当初の7名は顧問が提案した「課題→実作→合評」の活動を受け入れ、しかも徐々に熱心にやってくれた。その資質と言うか才能ある連中がたまたま集まつた。私は彼らを指導しつつ、彼らから大きな刺激を受け、触発されたと言える。

当時本腰入れて書こうと考えたのも1月に母が亡くなり、田舎に父が一人残されたことがある。これもこの年のたまたまである。

さらに齢40を超えて妻子なく、どうやら独身生活が続きそうだと思ったとき、中学のころから思っていた創作の道に進みたい、趣味ではなく本気で創作の訓練をしたいと思った。これも97年のたまたまだろう。

そして、文芸部2年目に「青春と初恋を同時進行で描く」挑戦として4つの課題を設定した。

実は私小説とするつもりはなかった。だが、最初の「公園を描く」で思いがけないことが起こる。女子一人が不参加で顧問もペアの一員として散策する羽目になった。

もちろん困った事態ではなく、内心ひそかに雀が躍っていた(^.^)。

一女子の不参加が偶然なら、私が参加せざるを得なかつたのも偶然である。

そして、極めつけの偶然が修学旅行先の北海道で起つた。「公園を描く」の相手だった女子部員とたまたま三度も二人だけとなつた。架空部員の青春と初恋を私小説として描けると確信した瞬間だった。

余談ながら中一のとき父から「お前は将来何になりたいんだ」と聞かれたことがある。私は「小説家になりたい」と答えた。

すると「父ちゃんと母ちゃんの子に作家の才能はないからあきらめろ」と言わされた。それ以来「創作の道に進みたい」との思いは封印された。

それが途切れることなく心の底を流れていたことは間違いない。

実際の中途退職まであと1年を要するけれど、「退職して創作の道に進もう」との思いは彼らと過ごした3年の間に固い決意となつた。

極端に言えば、彼らと過ごした濃密な時間がなければ、私は教員をやめず、定年まで勤めたかもしれない。

あれから早3×10年近く。当時顧問の強引な要求に応えてくれた文芸部員には感謝の思いしかない。

ただ、本稿を読んだ元部員たちは「先生は自分のために私たちを利用したの?」とつぶやくかもしれない。

「そんなことはない!」と叫びつつ、「そ一いう面もなきにしあらず」と白状したい(^\_^;)。

---

さて、本稿をこれで「終わり」とすれば、読者はあることをつぶやかねばならない。一つは伏線について。もう一つは全体について「あれっ、これで終わりなの？」と。

ある伏線が回収されていない。お気づきだろうか。

そして、これで終わりとすれば「～～(ほにやらら)が少なすぎるんじや」と言いたくなる。表紙から数頁を再読すれば答えがわかると思うので、試みていただきたい。

## [★] 読者への罠

さて、ここまでを「もじのイチ」主催遠野喬志君に読んでもらった。

彼は眉根を寄せ、上目遣いのまなざしでつぶやくように言った。

「先生。これって遠野喬志誕生秘話と言うより、御影祐誕生秘話じゃありませんか」と。

元顧問笑みを隠しつつ「やっぱりわかったか(^\_^;)」

喬志「わかりますって……(-\_-)」

これは当然読者もつぶやかねばならない感想。

本稿の表題は「Y高文芸部物語——遠野喬志誕生秘話」となっている。

きちんと読んでいれば、(後記)まで読み終えたところで「はて？ 副題の遠野喬志君の秘話は何かあったかなあ」との疑問が出てしかるべき。

せいぜい「文芸部部長だった、キーボード入力が巧みだった、中学校から小説を書いていた」くらいだろうか。紹介作品も他の部員とどんぐり状態である。

もう一つ、伏線について。2頁に以下の言葉がある。

---

ちなみに 10 をひっくり返せば 01。すなわち 101 匹わんちゃんならぬ 11 人の文芸愛好家がこの年あの場所に集まることになる。

当時の顧問にとって彼らと過ごした3年間は宇宙空間に浮かぶ孤独な惑星がテンペル・タットル彗星と出会ったときのような、稀有にして素晴らしい偶然だったと感じている(以下「私」)。

余談ながら4年後の3月、私は早期退職して執筆活動に乗り出す。彼らとの邂逅と3年間がなければ、私は教員をやめることなく、創作の道を進むこともなかっただろう。

【ここは新たな伏線(^.^)。「テンペル…彗星？ 何それ」とつぶやけば、伏線だと気づく。どこで回収されるか?】

---

わざわざ「テンペルタットル彗星」は伏線だと注意喚起している。

だが、これまでこの件に触れた個所はない。これで終わりなら、伏線未回収の欠陥作品である。

そして、読書力高く勘の鋭い人はそのとき気づいたのではないか。  
「もしかしたらこれは全体のまとめか。この作品は遠野喬志ではなく顧問を中心に語られるのかもしれない」と。その予感、的中である(^\_^)。

さらに読者に仕掛けた罠がある。  
目次は以下のようになっていた。

---

== 目 次 ==

[1] Y高文芸部活動方針	2
[2] 部活1年目	7
[3] 小説の三要素	17
[4] 文芸部2年目の活動	26
[5] 地味イな青春論	33
[6] ブンゲーブの青春	38
[7] 北海道、三度の偶然	44

---

後 記

[7] の下「後記」の間がなぜか1行空いている。  
「あれっ？」とつぶやいただろうか。わざと[8]を抜いたのである(^.^)。  
「そりやない。こんなによく見かける！」と非難ごうごう？

また、51頁の「後記」も(後記)となって( )付きである。  
すなわち、本来の後記ではない——ことをほのめかしている。  
それにここまで手に取って読めば、まだ(不自然な)数ページが残っていると手触りでわかる。「まだ終わっていないぞ」とつぶやく……。

そこで追加される[8]が以下のとおり。

---

[8] 遠野喬志誕生

---

私は遠野喬志君に言った。  
「実のところ君の文芸作家としての誕生はここにはない。それをこれから語る」と。

## [8] 遠野喬志誕生

さて、遠野喬志誕生、極め付きの秘話を語る前に、もう少々文芸部のその後を語つておきたい。

先ほど書いたように、2年最後となる課題が「変身譚—花びらかまきり—」(花びらカマキリのビデオを参考に変身譚をつくる)であった。

これも面白い作品が集まった。3学期を使って執筆、ワープロ打ち込み、3月学年末試験後合評となった。文芸部の全体活動はこれでほぼ終了と言えよう。

その後3学年に進級して新入生6名が加入。新部員に対して1年時の課題が繰り返されたので、3年生は参加フリーとした。

ただ、1999年文化祭『百八煩惱』の特集は「新聞記事の小説化」と決め、1年と3年全部員が書くことにした。

### 課題「新聞記事の小説化」

---

#### 条件

下の「新聞記事」(1999年3月)をもとに、小説を作る(詩・エッセー・短歌連作も可)。

- ・小説の三要素(時・所・人)を必ず入れること。
- ・内容は新聞記事と全く同じでなくともかまわない。

#### 新聞記事【わが子二人を電車に乗せ置き去り】

(当時は原文だが、引用元不明なので要約とする)

\*\*\*\*\*

1999年2月、風俗従業員N(31歳女性、大阪市在住)は自分の子供二人を電車に乗せたまま置き去りにしたとして京都府警に逮捕された。容疑は27日午前11時半ころ長男(8つ)と長女(7つ)をJR新大阪駅に連れて行き、切符を買い与えて「おばあちゃんが迎えに来るから京都駅で降りなさい」とうそをつき、二人を電車に乗せて放置した疑い。N容疑者は二人を学校に通わせておらず、「学校に行かせるのが面倒だった」などと話しているという。

子供二人はだれも迎えに来ない京都駅で途方に暮れていたところ、同日夕、駅員に声を掛けられ、京都市の児童相談所に保護された。同署によると、二人は現在大阪市内の児童相談所で暮らしており、「落ち着いている様子」とのこと。

\*\*\*\*\*

---

提出された14作は合評を経てそのまま文化祭『百八煩惱』に掲載した。

屋上屋に近いし、本題から逸れるので、紹介は割愛したい。

ただ、これを取り上げた顧問の思いを「後記」に書いた。それを引用する。

---

## 後記 「子どもが流す一粒の涙は地球より重い」(ケストナーの言葉より)

一つの新聞記事に、どれだけ想像力をふくらませるか。人の心の痛みと哀しみをどれだけ自分のものにできるか。数行の新聞記事は単純に事実の断片しか伝えてくれません。水商売の母親が二人の子どもを捨てた。わかることはそれだけ。

なぜ母は我が子を捨てたのか。子ども二人はそのことをどう思ったか。背景には何があったのか。どんな事情があったのか。それら一切はわからないまま。

そこで部員は想像力をふくらませて作品化していく。事実をそのまま書けば、経過と結果はわかっている。だから「表現力の勝負だよ」と顧問は言いました。

そうして完成した作が 14 編。部員は I II III の 3 パターンに分けたことを不満に思うでしょう。しかし、読者に読んでいただきたいと思い、敢えて分けました。

I オーソドックスに、そして人間のある部分をまだ信じたい——作品群

II おそらく「怒り」を内に秘め、それをストレートに表現した——作品群

III テーマを自己に引きつけ、課題にとらわれることなく自由に描いた——作品群

稚拙・未熟な作品はあります。ナイフが出るし、虐待、墮胎、殺しも出る。眉をひそめる方もいらっしゃるでしょう。しかし、これが現在の高校生(文芸部員)の「表現」だと思い、全て掲載することにしました。

破壊と殺意と怒り。そして、怒涛のエネルギーの表出は昔も今も同じかもしれません。ただ、人の心の痛みを感じ取り、想像力で表現した——そのことは信じていいような気がします。

---

表題の「子どもが流す一粒の涙は地球より重い」はドイツの児童文学学者エーリッヒ・ケストナーの有名な言葉。当時は「よく知られているだろう」と思って説明を省略した。今回は補足するとケストナーの『飛ぶ教室』のプロローグにある。

そこで描かれたのは父に捨てられた男の子のエピソード。アメリカの港で父親から「ドイツに着けばおばさんが待っている」と言われ、一人で船旅をする。だが、ドイツの港で誰も現れない。夕方、男の子は一粒だけ涙を流した。

ドイツで『飛ぶ教室』が発表されたのは 1933 年(昭和 8 年)。当時は日本でも口減らしのために子どもを丁稚奉公に出したり、娘を女郎屋に売り渡すことがあった。

20 世紀前半の子捨てが 1999 年の日本で起こることは、と思って課題とした。

そして、2025 年現在に至るも日本と世界のどこか——至るところで子どもは一粒涙を流している……。

余談ながら、『飛ぶ教室』は私の小学校時代何度も読んだ海外文学。これとマーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』の 2 作が「将来小説家になりたい」との思いを生んだ我がベストツーである。

それはさておき、文芸部員3年生は2000年3月Y高を卒業し、それぞれの道に進んだ。

同時に顧問も転勤した。遠野喬志君は文芸関係の専門学校に進学し、実家を離れ東京で一人暮らしを始めた。生活費を稼ぐためもあったのだろう、新聞配達のアルバイトをやっていた。

昭和を生きた私の世代は新聞配達と聞くと1964年に山田太郎が歌ってヒットした「新聞少年」を思い出す。

ちょっと1番の歌詞を紹介しよう。

僕のアダナを 知ってるかい  
朝刊太郎と 云うんだぜ  
新聞くばって もう三月  
雨や嵐にや 慣れたけど  
やっぱり夜明けは 眠たいな (作詞八反ふじお)

【「新聞少年 山田太郎」でネット検索すれば、歌を聞くことができます。】

家が貧しかったり、何か目的があってお金を貯めたければ新聞配達をやる——それは昭和の少年の定番だった。遠野喬志君にとって明かしたくない過去かもしれないが、平成の世にそれをやったことは秘話として語っておきたい。

《ここから「じいちゃん」口調 (^\_^;)》

さて、ときをさかのぼること四半世紀-1。2001年、寒さが身に染みる晩秋のことじや。

わしは3月に教員を早期退職して執筆活動に入った。

半年ほどかけてある教育的エッセーを書き上げたが、原稿用紙にして1000枚近い長編。出版を考えたけれど、見せた友人たちは誰も「売れない、読まない」と悪評ふんぶん。

失意沈痛の思いを抱えつつ「さて、これから何を書こう」なぞと考えておった。

11月に入ったころ、ある友人から「シシ座流星群を見に行かないか」と誘いがあつた……。

以下そのことを書いた「シシ座流星群観測記」なる文章。御影祐のホームページに掲載した。本稿読者にぜひ読んでほしいのは[2]。

これこそ遠野喬志極めつけの秘話だとわしは考えておる。

\*\*\*\*\*

## シシ座流星群観測記

2001年11月18日(日曜)、私は友人と長野県清里までシシ座流星群を見に行った。以下[1]はその観測記であり、[2]はその後日談である。どちらもメール形式。

### [1] 見ました！ シシ座流星群

\*\*\*\*\*  
ところで、全国的に有名だったシシ座流星群騒動。

行ってきましたよ、私も。それもはるばる清里まで。快晴満天の星空の下で、ホントに流れ星のどしゃ降り状態。大感激の、そして、猛烈な寒さの中、深夜数時間の体験でした。

11月18日(日曜)早朝、以前同僚だったM氏より電話があった。清里までシシ座流星群を見に行かないかと言う。彼は理科の先生で、私はシシ座流星群のことを彼から聞いていた。その後何度かメールをやりとりして私は「一人で見に行きます」と伝えていた。

M氏によると同じく同僚だったK氏も一緒に行くそうだ。K氏の兄の別荘が清里にあり、そこで仮寝して深夜近くで流星を見ようという。

私は一人で八ヶ岳山麓の天女山に登って流れ星を鑑賞しようと思っていた。だから、渡りに船とすぐに賛同した。そして午後三時頃、私たち三人プラスK氏ご子息のT君(小学校3年)と一路清里へ向かった。

天気予報は快晴だったのに、中央高速を走っている間ずっと重たい雲が空を覆っていた。

「これじゃア相模原では観測できないのではないか」とか、「わざわざ遠くまで行って曇り空の可能性もあるね」などひとしきり話が弾む。

M氏は「どしゃ降りの流れ星かも」と言って我々の期待感を高める。しかし、空は相変わらず曇天のまま……。

中央高速を走ること二時間、八ヶ岳が見える頃やっと雲がなくなり、かなりの晴天が望めそうな空模様となってきた。この日は日曜日で、競馬GⅠマイルチャンピオンシップがある日だった。

私は車中で競馬放送をつけてもらい実況中継を聞いた。すると電話投票で購入していた⑩の本線で26倍が的中した。私にとっては久々の快挙！

……なんてこともあり、流星群観測への期待はいやが上にも高まるのであった(^\_^)。

午後六時前清里へ到着。既に気温は5度でかなり寒い。その後スーパーで夕食用の食べ物と酒を買い、K氏兄の別荘へ向かった。築十年とは思えないほどきれいで大きな別荘だった。

乾杯した後七時過ぎにもう就寝。コタツに雑魚寝したので、あまり眠れず、うつらうつら状態のままだった。しかし、いつか寝入ったようで、妙な現状追認の夢を見た。

夢の中でも私は流星群を見に別荘へ来ていて、しかもその建物は周囲と天井が全てガラス張り。まるで透明温室のような部屋にいた。

私はこれなら最高の環境で流れ星が見れるぞと思っている。そして、ガラス部屋の周囲では（寒いのに）半袖姿の人がジョギングをしている——など妙な夢だった。

みんなそろそろ目覚め始めたのが、午前0時頃。その頃から既に別荘の外で木々の間から流れ星がぽつんぽつんと見えていたようだ。私以外の三人は外に出て時折歓声をあげていた。

午前一時前、厚着をしてポケットには携帯カイロを二つ突っ込んで別荘を出発。車で近くの駐車場まで出かけると、いよいよ流星群観測の開始である。

空を見上げれば、くっきりと浮かんだ満天の星々。私の田舎も天の川と星々がとても美しいところだ。私はそのことを折々話題にしていたが、清里の空はそれ以上に澄み切った星空だった。しかも、空がとても近く感じられる。

だが、早くも初冬と言うべきか、外はものすごい寒さだった。K氏によると、車内の温度計は氷点下二度だったと言う。

私たちは駐車場にシートを敷き寝転がって夜空を眺めた。中天には一際輝く一等星がある。北の方向を見れば、地平線近くの山々から北斗七星が顔をのぞかせ、その先に北極星を確認できる。東の空には、はてなマークを逆さにしたようなシシ座。

そして、流れ星は着いたときから数分の間隔をおかず見ることができた。近くでも観測をしている別のグループから歓声があがる。私たちも流れ星を見つけるたびに同じような歓声をあげた。

流星は東に位置するシシ座からと言うより、東西南北全ての方向から流れてくる。最初は数分に一ヶから二ヶ。そのうちどんどん増えて二連発に三連発。明るいものから光の弱い流れ星まで様々。オレンジ色の光を発しているものや緑色のもの。それが長く尾を引いた時には一際大きな歓声があがる。

駐車場近くには次第にかなりの人がやって来た。その塊から「おーっ」という声や、女性の「きゃー」なんて声も聞こえてくる。

寝転がって空を見ても、全天が見えるわけではないしばしば見落としてしまう。目をぐるぐる回転させながら空一面を見張る感じだった。「カメレオンの目がほしいね」なんて言葉も出た。そんな感じで私たちはしばらく流れ星観測を続けた。

そして、午前一時五〇分ころ。この夜最高にして最長の星が流れた。

それは星空の中天から北斗七星、北極星上部に向かって緑色と青色を混ぜたような、光り輝く光の帶となって一筋流れた。輝線はものすごく太く長く、先端は丸い光の球

になっていた。

一瞬周囲が明るくなったような錯覚に陥るほど、その輝線は太かった。そして、流れ星先端の光球が破裂したかのように割れると、さらに小さな光球が流れて地平線まで落ちて行った。その後光球が破裂した付近はぼんやりした雲のようになって空中を漂っている。

M氏が「あの雲を流星痕と呼んでいる」と説明してくれた。雲は十分ほどそのまま夜空に漂っていた。

午前二時半、最初の流れ星のピークがやって来た。上下左右、東西南北に関係なく、至る所から流星が生まれる。次第にその間隔は数秒おきになる。

私とM氏は背中合わせになって数えてみた。一分間に最低三〇ヶは流れていた。流れ星は時間の経過とともに南の空で多く見えたり、北方で多く見えたりする。光跡も短いもの、太いもの、長いものなどさまざま。とにかく途切れることができなかつた。終わりがなく、また、どこかで必ず1ヶは見ることができた。

しかし、この間身体はぶるぶる震えっぱなし。厚着をしてカイロを持っていたって極北の毛皮服ではない。寒さが身体の芯までしみ通り、どこにも暖かさを感じられない。どうやら夢は正夢だったようだ。つまり、冬の戸外で半袖短パン姿一枚(!)と同感覚だったのだ。

K氏ご子息のT君は耐えられなくなったか車に戻った。外ではM氏が一番元気だ。彼はシシ座流星群について解説してくれた。この流星群はテンペル・タットル彗星が宇宙空間にまき散らしたチリの中を、地球が突っ込むことによって起こっていると。

私は先日佐治晴夫著『宇宙の不思議』を読んだ。それによると地球は1秒間にほぼ1キロ自転し、太陽の周囲を1秒間に30キロ公転しているとあった。

ということはわずか10秒の間に地球は300キロ動いているということだ。1分で1800キロ、1時間だと18000キロ！

私はとめどなく流れる星を見て、宇宙に浮かんだでっかい地球が彗星のチリの中を、ずーんと音立てて突っ切るイメージがはっきりと感じ取れた。その証拠が目の前を流れるたくさんの光の尾びれだと思った。

さすがにこの後は猛烈な寒さに耐えきれず、私も車内に飛び込んだ。そして、やや暖まってから再び外へ出た。

次のピークは午前三時過ぎにやって來た。またも、星が次から次に流れる。どしゃ降りとは言えなくても流れ星のさみだれ状態であることは間違いない。私たちの「すごい、すごい！」という驚きと感嘆の声は漏れ続けて止まることがなかつた。

さすがにこの頃になると見学者も徐々に減り始めた。そして、私たちも三時半ころ別荘へ戻った。その途中も、また四時過ぎ帰路に就いた時も流れ星はまだ続いていた。

別荘を出て高速を走ること二時間。その間前の座席のK氏とM氏は時折「流星だ、流星だ」と声をあげていた。後部座席のT君（はお休み中）と私は流れ星を確認できなかった。

高尾のM氏宅に近づいた頃東の地平線がオレンジ色に変わり、夜が明け始めた。そのとき私は蒼白い空に一筋の流れ星を見た。それが今回最後となる流れ星だった。

ニュースによると北海道で五千ヶ、八ヶ岳の野辺でも四千ヶの流星が確認されたとか。

結論——やっぱり流れ星のどしゃ降りだったようです。得難い体験でした。

\*\*\*\*\*

## [2] N君の返信メールについて

私は18日のシシ座流星群観測記メールを友人知人、教え子など十数人に送信した。その中に昨年3月Y高を卒業したN（kousuke）君もいた。N君は高校卒業後創作系の専門学校に進学した。彼は実家を出て東京のある町で一人暮らしを始め、新聞配達をしながら学校に通っていた。

大学へ行かないこと、一人暮らしをすることなど（詳しくは知らないけれど）父親との確執もあったようだ。私は流星群の前夜彼と一杯やっていたし、メールのやり取りもしていたので観測記メールを送った。

返信をくれた人の中に「シシ座流星群を見た」人はいなかった。唯一N君だけが「自分も見た」と書き記してきた。

彼は18日の深夜（19日未明）ではなく翌20日未明、新聞配達の途中シシ座流星群末期のかけらを目にしたらしい。

彼はそのときの感想と、現在抱えている悩み（と言うかいろいろな問い合わせ）に対して彼なりに答えを得たことを返信してきた。

メールにはN君がその偶然体験から得た答えがとても真摯な筆で書かれていた。

私は彼のメールにとても感動した。そして、彼がその偶然体験から獲得した答えをさらに補強してあげようと思った。そこで数日後、彼への返信メールを書き始めた。

---

返信遅れてメンゴ（古いッ！　てか？）。

kousuke君のメールを読んだのが22日の夜。それからもう4日たちました。

すぐに返事を書こうと思いながら、木曜夜は旧友との飲み会。そして、金土日は何やらかにやらで日が暮れ、特に土曜は朝から府中東京競馬場へ行ってボロ負け食らい、負けを取り戻そうと日曜も在宅競馬に励めば、さらにボロ負けかつ食らい……おいおい、無職徒労のヤカラが何じゃいな——と気分はブルーのままキーボードに手がのび

ませんでした。

返信を書かなきやいけない人が数人。なかなか気が乗って来ない。特に kousuke 君のメールに対しては《真摯な告白》に感動を覚えました。

と同時に何と書けば良いか、人生の先達として「気の利いた一言も言わばなるまいに」と思うと、これまたペンが重いのでした(もちろん比喩として)。

しかし、書くという行為はどこかで踏ん張らないと、日が経てば経つほど嫌気が増します。

教師稼業で言うならテストの採点。あれって生きのいいうちに採点しないと、どんどんいやになる(^\_^;)。

中間・期末テストなどはすぐ採点するけれど、県下一斉試験などは返却がだいたい 10 日後。「そのうち採点するか」などと放っていると、次に取り出して採点するときのうんざり感と来たら……丸つけのはかどらないこと、はかどらないこと。気分がちっとも乗らない。

他の先生方も似たようなこと言っていました。だから、私は採点はいつでもすぐやる主義でした。

あるいは、返信書きは創作にも似ている。文章を書きながら、しばしば自分の下手さ加減にうんざりする。しばしば中断する。最後は放ってしまう。

だが、書くことをやめると、次に書き始めるときがまた苦しい。前以上にうんざり感が湧いてくる。だから「何て下手くそなんだ」と自己嫌悪に陥っても、書き続けることをやめない。

一度取りかかった書き物はとにかくエンドマークをつけるまで書きまくる。そうすると何となく「いけるかもしれない」と思い、また書こうかって気になる……。

メールがそれに似て「いい言葉、気の利いた言葉を連ねよう」と思うと、しんどさが先立つ。だから、そんなことは考えない。まとまらなくていい、堂々巡りでも誤字脱字だらけの下手な文章でも構わない——そう踏ん切ると結構あっさり書けるようになる(^\_^)。

とまあこのような心理の流れを経て、私は kousuke 君のメールに一言だけ返事を書こうと決めました。

-----  
メール読んだよ。ものすご感動した。初めて kousuke 君の赤裸々な心の中をのぞき見ることができた。素晴らしいと思った。ガンバ!

以上、終わり(^.^)。

-----  
……さてさて、これでわしの返信メールの責任は果たしたわいの。後は何をいくら書いたとしても、上記で尽くされておるので構わんじゃろう。

たぶん kousuke 君はあのメールを書くことで自己認識したのだろうし、書くことに意味があったんじやから、わしにそれ以上何か感想やら評価じみたことは求めておらんじやろう。

だからして、ま一彼のメールによってわしが触発されたことを、ぽつぽつ書いてみることにしようと思う。

それはじやな……オホン「偶然の中にある必然」ということじや。

偶然とはホントに単なる偶然なのか。何かその中に必然とも言うべき答えがあるのではないか、ということじや。

kousuke 君は 18 日深夜のシシ座流星群騒動は興味もなかつたし、部屋で惰眠をむさぼつとったそうじや。

だが、流星は引き続き 19 日深夜にも流れとつた(らしい)。彼は 20 日未明新聞配達の途中でその流れ星を数ヶ見ることができた。

流星群のことはすっかり忘れていたけれど、いくつかの流れ星を見てふつとシシ座流星群のことを思い出したっちゅうことじや。

>話題にも上っているその日の空を見ることも忘れて、  
>ただアポトーシスの淵をふらふらしていた俺にも、  
>もう終幕の頃ではあつたけれど、流れ星は見えた。  
>一度だけでなく、三度、四度。

…………(-\_-) それにしても、このあぼ、あぼ、アポトーシスとは一体何じや？  
まったく最近の若いモンは、年寄りの知らん敵性語を使うから困りよる。  
ぶつぶつ……

それはさておき、kousuke 君はその流れ星を見てかなり感ずるものがあつたようじや。彼は次のように感想を書き留めておつた。

>願いを叶えていいよ、そう言ってくれているように思えた。  
>思うことを成し遂げていい。  
>そのためのチャンスならいくらでもある。  
>ひどく勝手な解釈かもしれないけれど、  
>誰かが、強いて言えばしし座と、しし座である俺自身の血が、  
>そうささやいてくれているように思えた。  
>……今考えれば末期症状ですな。(笑)

kousuke 君は確か 8 月の生まれじやつたから、シシ座とは彼の生まれ月の星座でもあるわな。

シシ座に生まれた男の子がつい先頃二十歳になった。そして、晩秋のある日未明、シシ座流星群と名付けられた流れ星をたまたま見かけた。しかも汚れきった都市東京で数ヶも。

偶然？ もちろん《たまたま》であり、単なる偶然じゃろーな。  
じゃが、そのとき多くの人は安眠をむさぼっておった。流れ星のことを聞いたとしても(翌日仕事や学校があるし)、ぬくぬくとした暖かいふとんの中にいた。  
知らなかつた人、忘れた人はもちろん床の中。たまたま用足しで起きたとしても、寒くて暗い外に出て行くはずもない(最近のトイレは外が見えんしの一)。

では、なぜ彼は流れ星を見られたのか。  
答えは人々が寝静まっているときに働く新聞配達の仕事をやっていたからじや。この《たまたま》を逆に言うと、彼が《新聞配達の仕事をしていなければ》流星群のかけらは見られなかつたことになる。  
ということはそれも偶然？ まーもちろん「たまたま」じゃろーな(^.^)。

じゃが考えてみようか。  
そのとき日本中で新聞配達をしていた人は一体何人おつたのじやろう。  
数百人？ いや、もっと多い。数千人？  
では、そのうちシシ座流星群の流れ星を《たまたま》見かけた人は一体何人いたじやろう。  
数百人？ あるいは数十人？  
調べようがないからはつきりしたことはよ一言えん。じゃが、確率的にかなりの低さであろう事は間違いあるまいの。

最後に、その流れ星を見た新聞配達の人の中に《シシ座の人間》(!)は何人いたじやろうか？！

うなんじや、驚いたかの？ この極め付けの偶然に。  
こーなると、もう偶然という名で済まされない確率の低さじやと思わんかい。  
あるいは、それは日本でただ一人、kousuke 君だったかもしれんということじや。

わしやー無神論者じやから、それが神のなされたことなんぞと言うつもりは毛頭ない。  
じゃが、大いなる何かはその日 kousuke 君だけにそのような稀有な体験をさせたと言えるかもしれんじやないか。偶然がこんなにも重なるなんて。

さらに、肝心要の大切なことはその次じや。  
仮にそのような稀有な人が数人いたとしようか。しかし、《そのとき何らかのことを感じ取った》人は、さて何人いたじやろう。

kousuke 君は書いておった。シシ座流星群のかけらを見て  
 「願いを叶えていいよ、そう言ってくれているように思えた」と。  
 さらに君は次のように書いた。

- 
- >本当に久しぶりの、嬉し涙でした。
  - >自分を恥じて落ち込まなくとも、
  - >いや、落ち込んで閉じこもってしまっても、
  - >まだ生きてみていい。動いてみていい。
  - >自分の心で考えて、思うままに創っていけばいいと。
  - >寂しがり屋ですね。
  - >自分ひとりで生きていくみたいなことを言っていても、
  - >結局癒してもらうのは他の誰かの力なんですから。
  - >この時は、星にですか、偶然にですか、幸運にでしょうか。
  - >五度目の流れ星に、「ありがとう」と言いました。
  - >もちろん三回。
- 

あるいは、彼と同じ偶然に遭遇した人が仮に数人いたとして、  
 「あっ流れ星イ、ラッキー！」と、それだけで済ませる方が多いのではなかろうか。  
 じやが、kousuke 君はそこにものすごく深いものを感じ取った。  
 彼はその偶然をきっかけとして、自分の問いに自ら答えを得たんじや。  
 最後を「ありがとう」で締めくくっていることもまた素晴らしいではないか。

こ一なると、おそらくこのような体験をしてそこに深い意味と答えをくみ取ったのは、この広い日本の中で kousuke 君ただ一人と言っていいじやろう。

つまり、偶然がいくつも重なって、シシ座に生まれた新聞配達の少年がシシ座流星群を見かけたのは、たぶん世の中に彼一人だけだった。

そして、彼は彼だけに与えられたこの「偶然」を生かし切った——とわしには思えるのじや。

そう考えると、彼が数あるフリーター的な仕事の中で新聞配達を選んだことは何か重い意味を持っているかもしれない——そもそも思えてくるじゃないか。

全ては良い方に向かっている。何か大いなるものが自分の信じた道を突き進んでいいと教えてくれている。正にそう思える。

kousuke 君がシシ座流星群をたまたま見かけた。その偶然をこのように分析してみると、彼が感じ取った答えは正しいと言えるのではないだろうか。

——以上。

それがまーわしの言う「偶然の中の必然」じやな。たまたまの偶然体験の中に、自

分にとって必要なものが隠されているということじゃ。そこに答えを見い出せるということでもある。

ゴホンゴホン……おっとちと風邪気味のようじや。我が教えはこのくらいにしどうかいの。

じゃが、今思い出したことがある。わしは 18 日の深夜数時間ずっとシシ座流星群を眺めておった。

ところが、あれだけ多くの流れ星を見ながら「お願い」のことはすっかり忘れ果てておった(^\_^;)。

数え切れないほどのチャンスがありながら、一度もお願ひをつぶやくことなく、ただもう「すごい、すごい！」と眺めておっただけ！

世界の平和も、家族の健康も、わし個人の成功を祈ることもなく、ただ呆然と眺めておったんじや。

今考えてみると、千載一遇のチャンスに「お願ひ」を言い忘れたとは。全く信じられないノ一天気ぶりだったということじゃな。年はとりとうないもんじやて。

ふつぶつ……。

これが遠野喬志くん最後の秘話であり、「遠野喬志」誕生の瞬間だった、と私は思っています。

それから20数年。今の活躍ぶりはその後の苦闘あってのことかなとも思います。

遠野くん、これを読んで……

「先生、最後って書いてありますけど、最初じゃないですか？ 最初にして最後みたいな……」

ふむ。それは別に不思議なことではない。君の高校時代、専門学校時代に何があつたか。これ以外知らん。

君は文芸部員の一人に過ぎず、私にその内面を明かすことにはなかった。

作品も柔らかい心を鋼鉄の鎧で覆っていた(と当時顧問は受け取った)。

だから、高校時代、誰かにほのかな恋心を抱いたとか、家庭内のものめ事とか、進路について悩んだこととか、それを知るのは君だけじゃ。それをこれから書くかどうかは君次第。

まー君が私の歳になるまでまだ $3 \times 10$ 年近くある。

私はいずれ君が——いや、君だけでなく 10 名の文芸部員たちが「青春と初恋の文芸部物語」を書いてくれることを期待したい。(了)

## 後記

これで本当の後記です(^\_^;)。

ラストの「シシ座流星群観測記」の中に「テンペルタット彗星」出てきましたね。これにて伏線回収。

そして、以上を読み終えたとき次のようにつぶやいたでしょうか。

「[4]北海道、三度の偶然——はラストのための伏線だったか」と。

遠野喬志君の専門学校時代、彼は新聞配達の途次たまたまシシ座流星群末期のかけらと遭遇した。それを見ることができたのは彼が毎日未明(人々が安眠をむさぼる中)新聞配達のバイトをしていたからであり、さらに彼はシシ座の生まれだった。この稀有な体験ができたのは日本で彼一人だけだったかもしれない。

だが、次なる問題はその体験から「自分の答え」を見出すかどうか。むしろそちらの方が大切だ。

敢えて言えば、似たような体験——当人だけに通じる稀有な出来事は誰でも人生に一度か二度はあると思う。それをちらと見て(経験して)「ふーん」とつぶやいて終わるか、「あっ流れ星、ラッキー」で終わりにするか。あるいは、自分の悩みに必要な答えを見い出すか。そこに境目があると思う。

この違いはどこで生まれるのだろう。当人の人間性？ 運命？

それこそ幸運な星に生まれたかどうか？

いやいや、「どれだけ深く悩んだか、今悩んでいるか」だと思う。

悩みをしつかり見つめている人だけが自分に必要な答えを見い出せるのだと思う。

喬志君の悩みが深かったことは彼のメールからよくわかる。

ところで、私の方は彼のおそらく3倍は悩みが続いている(と思う)。

中学校のころ「小説家になりたい」と思いながら、ずっとその気持ちを封印していた。高校は5年制の高専に進学。しかし、理系工学系に挫折して3年で中退、一浪後大学国文科進学。その間詩や小説らしきものを書き続けたものの自作に全く自信が持てず、落選確実な文芸新人賞に投稿することはなかった。

そして教員生活ほぼ20年、「創作は趣味で終わるか」と思った1997年、母が亡くなった。父が実家に一人残される(偶然の)事態が発生した。そのとき「もう一度本気で書いてみよう。創作を自分に課そう」と決意した。

すると4月たまたま10人の文芸部員が現れた。それから1年半、私も部員と同じ課題をこなすことで徐々に自信が芽生えた。自分を文芸部員「久保はてな」に託して彼にフィクション風私小説を書かせた。

自分が高校生だったら、惚れるであろう女子部員を「マーヤ」として長い小説も書いた。北海道の修学旅行で思わぬ偶然が二度あったとき、「三度目がほしいけれど、ま

さかないだろう」とあきらめていた。

ところが、思いもかけない三度目の偶然が発生した。これで「小説が書ける」と思ったのは単にそのときだけのことではなく、今後自分は(死ぬまで)小説を書き続けていいという自信、その答えを得た瞬間でもあった。

先ほど「北海道、三度の偶然——はラストのための伏線だったか」と書いた。

もちろん伏線と捉えて構わないけれど、当時私は偶然から学び、自分だけの答えを知るという考え方を持っていた。だから、修学旅行の偶然体験によって「小説を書ける」との確信を得た。そして、そのような私だからこそ遠野喬志君のシシ座流星群遭遇の意味に気付けた——そもそも言える。

本稿が読者各位の参考になるかどうかはわからない。ただ、悩みが深ければ深いほど(キリストの言葉ではないけれど)幸いだと言いたい。きっとどこかで本人だけにわかる偶然が起こり、答えを見い出せるのではないかと思う。

以下再び「ですます体」。

最後にもう一つ。本稿は2年前から「もじのイチ」を主宰する遠野喬志君のために書きました。相変わらず「ぼくの悪い癖」(杉下右京)で長くなってしまったけれど、「もじのイチ」や他の文学フリマに参加する人のため——創作を趣味とする方々の参考になればと思ってY高文芸部の創作訓練を紹介しました。

本稿では久保はてな君の創作は一部分しか掲載していません。御影祐のホームページ「ゆうさんごちやまぜホームページ」に全作掲載している(一部PDFファイル)ので、お読みいただければと思います(「御影祐」で検索すれば1頁目に出現)。

御影祐「ゆうさんごちやまぜホームページ——久保はてな作品集」

→ <https://mikageyuu.flier.jp/hatenakubo/kubohatenatop.html>

近年自分の書いた作品を活字化、冊子にして文学フリマで「読んでもらいたい」と思う人が増えているようです。それは旧ツイッターやインスタグラムなど短文発信にあきたらなくなった、もしくは「こんなものでは自分の心の叫びを訴えることはできない」と感じた人たちの創作欲ではないか。

心の叫びを文章化したければ、どんどん書いて分かち書きにすれば、詩らしきものが出来上がります。長く書くのが苦手なら短歌がいい。短歌の連作で充分心の内を描けます。

しかし、小説だけはそうはいかない。本稿で書いたように小説だけは訓練が必要。会話だけ書き連ねても小説ではない(脚本になるかもしれないが)。地の文こそ小説の肝——肝心かなめです。身の回りの具体的な情景を描く練習、自己の内心の感情を書き留める訓練を積んでほしいと思います。

以上。長文にお付き合いいただきありがとうございました。

2025年12月 御影 祐